

世界最初の月面歩行者から
親愛なる君へ



オルハザカザンバズチ

あらすじ

親愛なるチェット——

2009年7月21日、古い友人に向けて書かれた一通の手紙は、かつて人類初の月面歩行を達成した宇宙飛行士と月のウサギとの数奇な出会いを綴ったものだった。

38万4000キロを隔て、月と地上を舞台に繰り返される幻想と科学の邂逅。「偉大なる一步」から45年の歳月を経て語られる物語の結末とは——？

**世界最初の
月面歩行者から
親愛なる君へ**

第二版

折葉坂三番地

「月に来た人間を狂わせた催眠術。あの人間は弱かったわ。
月は人を狂わすの。そつ、月の兎である私の目を見て狂わずに居られるかしら。」

東方永夜抄 幻想の結界チーム Stage 5

◆アームストロングの手紙(1)

— 2009.07.21

— 親愛なる友人、チエットへ。

気付けば僕も随分な歳になってしまった。使い古された挨拶ではあるけれど、月日の経つのは早いものだと思う。ウォンサン湾で出撃の合間に、エセックスの休憩室で狭いベッドに寝転がって君や皆と馬鹿な話をしていたのは、実にもう半世紀以上も前になるわけだが、こうして思い返してもどうにも実感がわかないものだね。

そちらでカレンは元気にしているだろうか。君のことを困らせたりしていないだろうか。いくつになっても親離れできないのは恥ずかしい限りだが、どうにも君には甘えてしまうようだ。いつも迷惑をかけてばかりで済まない。

チエット、君には僕が困った時にばかり、一方的に愚痴を聞いて貰ってばかりだ。文句の一つも言わずに付き合ってくれる君にこれ以上を望むのはまったく筋違いではあるのだろうか。——どうか気を悪くせずに、今回もしばらく僕の、つまらない話につきあってくれたい。

僕はあの頃の僕たちが想像もしなかった未来、二十一世紀の今に生きている。ミレニアムを9年も過ぎたけれど、いまだに地球にはウエルズの火星人たちが降り立つこともないし、スタ

エセックス
アメリカ海軍の空
母。太平洋戦争に就
役した後、予備役を
経て大改修を受け
朝鮮戦争にも参加
した。

ー・ウォーズの舞台となるような宇宙連盟の繁栄は夢物語だ。

そして気付けば、僕が人類最初の月面歩行者として一步を踏み出したあの瞬間から、今日で40年が過ぎてしまった計算になる。まったく驚きというほかはない。

しかし何とも残念なことに、アポロ以来、あの月の沙漠に新しい足跡を付けにいく冒険は実現していない。人類の月面歩行者は依然として12人のままであり、あの頃、僕達には目と鼻の先に見えていた火星に辿り着く目途は立っていないんだ。それどころか、僕たちが本当にあの空に浮かぶもつとも近い天体まで、38万4000キロを往復してきたことを、本当にあった出来事なのかと疑う声さえ上がる始末だ。

バズはそれが大分鼻持ちならないようで、多くの著書を記し、フィクションの中に本人役で登場してまで自分が月へ行ってきたのだと主張を繰り返している。どうも彼は僕やマイクにも同じように、偉大なるアポロの使者であつたことを誇って欲しいと思っているようだが、こればかりは頼まれても少し困ってしまう。どうにも柄ではないし、そうやってあの業績を勲章のように僕個人の胸に貼り付けることは避けるべきだと感じている。それを表立って口にすれば、バズは酷く気分を害するだろうし、その事で一層僕を疎ましく思うだろう。その結果、こうしてチェック、君に愚痴めいたことを書き連ねることになってしまう。その結果、こうして僕がこうして態度を曖昧にしていることこそが、バズにとつては一番苛立ちの原因となるの

だろうけれど。

君も知つての通り、僕はニュー・ナインの一人として、10年間をNASAで過ごした。

月面歩行者は12人
アポロ計画において
着陸に成功したのは
6回。着陸船には
それぞれ2人が乗
り込み、彼等は皆船
外活動を行った。

ニュー・ナイン
NASAで2期目に
選抜された9人の
宇宙飛行士。ジェ
ミニ計画、アポロ計
画の中心となつた。

けれど、僕達アポロクルーの人生が語られる時、その大半の期間はあつてなかったことにされてしまう。

ミッシェンの手順の検討を重ね、睡眠時間を削ってシミュレータの開発や構築に取り組み、厳密なタイムテーブルに基づく船外活動の訓練を繰り返し——準備に明け暮れた7年間と、世界を上げての歓迎パーティに引つ張り出され、偉業を達成した英雄を一目見ようと詰めかけた観客の前で気の利いた台詞を——いかにもテレビ受けする『偉大な一歩』のような名言を捻り出すことを求められた3年間は、彼らにはまるで呼びではないものらしい。

長大なミッシェンから見てもほんの僅かな時間でしかない月への往復旅行こそが、僕の人生の真価だったのだと言われるのは、正直あまり好きじゃない。あの経験は僕にとつてかけがえのない、素晴らしいものではあるけれど、月での一週間のためだけにニール・アームストロングの人生があつたというように語られてしまうのは、やはり本意ではないんだ。

アポロ11号の船長が表舞台から姿を消し、仙人のように隠棲している事に関して、不思議に思う人々が少なくないことを耳にする。アポロ計画そのものの成功を疑う声上がるようになってしまったのには、僕にも責任の一端があるのかもしれない。

だから僕は今日、それにまつわる僕の過ちを——君に告白したいと思う。

チェット。まるで懺悔のように、君にこの話をすることを赦して欲しい。僕はあまり、クリスチャンとして敬虔とは言えないし、これはたとえ教会という場であっても話すべきことではないと考えている。僕はきつと神に赦されることを望んではいけないんだ。こうして君をその

隠棲している

アポロクルーの多くが自伝を書き、TVのドキュメンタリーに出演している中、ニールはそれらの記録を一切残していない。

代わりにすることは心苦しいが、どうか、頼む。

アポロについては、今も明かしてはならないいくつかの秘密があるし、今後も伏せたままになるだろういくつかの報告がある。僕は表沙汰にされていないミッシェンの意図……月への到達という計画の裏側にあった事情についても承知している。けれどこれから僕が話そうとしているのは、それらとは違うものだ。

これは僕達が月に向かう間の、コロンビアの中と、イーグルで着陸した静かの海で起きた、まったくの予定外の出来事だった。

だからこそ僕の他には、ごく僅かな人間しか知りえない事実だし、他のアポロクルーの機密とは別の理由から、決して口外してはならないものだった。

僕自身、これまで誰かに喋ろうとは思っていなかったんだ。

……まあつまり、僕も歳をとった、という事なんだろう。

こうして今、自分の老いを実感して——なあ、聞いてくれるかいチェット、なんと僕も来年で80歳だ。なにしろ一番下の孫ですら、あの頃、揺れる空母の狭苦しい船室で、ウォンサン湾の戦争に向かっていた僕達とそう変わらない歳になるんだ。少くらい感傷に浸っても仕方ないというものだろう？——とにかく、このまま黙っているのは果たして良い事なのだろうか、そう考えてしまった訳なんだ。

僕がこれから記すことは、ミュンヒハウゼン男爵の法螺話ように荒唐無稽な物語で、月の光に魅入られてしまった老人のたわごとであるかもしれない。

けれど、あの狭い船室で、皆が子供のように輪になって君の朗読する「ケイン号の叛乱」に熱心に耳を傾けていた時、僕が確かにあの船の存在を信じていたように、僕の思い出も同じなのだと信じた。

親愛なるチェット。僕の愛するカレンと共にいる、僕の友人。

僕はあの、アポロ11号の旅の中で――

地球から38万4000キロを隔てた月の上で、一人の月のウサギと出会った――

◆某専門紙連載記事「迫る月への出発」

— 1969.06.29

「私は我が国が、この10年間で終わるまでに人間を月面に到達させ、なおかつ安全に地球に帰還させることを約束する」

——J・F・ケネディ May, 25 1961

人類初の試みとなる月への到達——その時がいまや間近に迫っている。ニール、バズ、そしてマイク。偉大なる3人の宇宙飛行士を乗せたサターンVロケットの発射準備は、すべて問題なく進行しているとNASAの広報部より発表が行われた。

60年代の初め、ケネディが今後10年以内に人類を月へ送り込むと合同議会で演説をした当時、多くの人々はこの計画の実行に懐疑的だった。今は誰がそれを信じるというのだろう。

1957年、ソ連の打ち上げた人類初の周回衛星を皮切りに、ライカ犬たちが次々と宇宙に旅立ち、我が国は宇宙開発において東側の後塵を拝することが確定的となった。

さらに1961年の有人宇宙船ボストークによる人類初の宇宙飛行は、「地球は青かった」の言葉とともに全世界に衝撃を与えた。一連の「スプートニク・ショック」は、世界の最先端を自負していた我が国の科学技術への大きな危機意識を招いたのである。

しかし、この事態に発奮した者たちもまた少なくなかった。折しもケネディが掲げた公約によつて、来たるべき未来の宇宙開発への技術的優位性を取り戻すため、政治、科学、軍事の分野を超えて、大きな注力が求められていた。彼等は持てる力を結集し、人類の月到達という困難に挑んだのである。

人類の月到達を表明したケネディはその成就を見ることかなわずして凶弾に倒れたが、その遺志は次代へと引き継がれた。この挑戦のために政府は総額で250億ドルを超える予算を捻出し、40万を超える従業員と2万以上の企業や大学からサポートを得たのである。

まさにこれは戦争と同じ、国家を挙げてのプロジェクトであつた。しかし、これが誰かを傷付けるものではなく、果てのない宇宙へと向かう冒険心と探求心に満ちた平和的なものであつたことを誇るべきであらう。

「世界の目から見れば、宇宙での1番乗りは全てにおいて1番ということだ。宇宙での2番乗りは、何事においても2番手ということなのだ」

——ジ・エンソンの書簡 April, 28 1961

沸きに沸く宇宙ブームの中、多くの人々が明日にでも月に移住できるのだと夢を思い描いているが、今回のミッションは昨日今日、思い付きで急造されたものではない。10年という歳月と、関係者たちの血の滲むような努力の果てに辿りついたものだ。アームストロング船長以

ジ・エンソン

リンドン・ベインズ・

ジョンソン。アメリカ

合衆国第37代副

大統領、第36代大

統領。ケネディの暗

殺首謀者説なども

ある。

下の3名は、かつてのコロンブスのように、いまだ誰も見たことのない未知の海原へと漕ぎ出していくわけではないのだ。

計画に「11号」の名を冠する通り、アポロ計画ではこれまでに10回のミッションを経て、段階的に月へ向かうための準備を進めてきた。試験機であったアポロ1号機の痛ましい事故を乗り越え、アポロ4、5、6号は無人で宇宙へと飛び出すためのミッションを行った。次いで7号が地球の周回を達成し、1968年の8号ミッションではジム・ラヴェル他の3名が人類として初めて月の周回飛行に成功している。

そしてつい先日5月には、トーマス・スタツフォードらを乗せたアポロ10号がミッションに旅立ち、2度目の月周回飛行と、LMが有人による性能試験を行った。この時彼等は月の地表わずか15・6kmまで接近し、アポロ11号の着陸予定地点となる「静かの海」の綿密な調査を行ったのである。

そう、月への航路はすでに開拓されているのだ。あの天に浮かぶ月に、既に人類は眼と鼻の先まで接近を果たしているのだ。つまり、今回の11号ミッションは、その最後の15・6kmを縮めるものとなるのである。

この挑戦は決して蛮勇に任せた冒険ではなく、独裁者の気まぐれがもたらしたものでもない。人類を月に送り込むという荒唐無稽な計画に、臆することなく取り組み続けた多くの人々の10年に及ぶ努力の結実なのである。

LM (Apollo Lunar Module)
アポロ計画における月着陸船の略称。
10号での愛称はスヌーピー、11号ではイーグル。

◆某紙朝刊社説「アポロの使者たち、地上を発つ」

— 1969.07.17

—— “1969年7月16日 13時32分（UTC…協定世界時）”。

この時刻は人類にとって輝かしく歴史に残るものとなるだろう。昨日、ついにケープ・カナベラル、ケネディ宇宙センターより3人の宇宙飛行士を乗せたサターンVロケット、月探査船アポロ11号が打ち上げられた。

ニール・アームストロング船長。

マイケル・コリンズ司令船操縦士。

バズ・オルドリリン月着陸船操縦士。

人類初の偉業を背負い、アポロに乗る選ばれた者たちはこの3名である。

当日の基地周辺は快晴。華氏95度を越える気温の中、この瞬間を一目見んとケープ・カナベラルに押し掛けた観客は100万人にも及んだ。彼等は人類初の偉業への「参列証明書」に50セントを支払い、2ドル95セントの「宇宙ペン」を買うために行列に並び、その感動を形に残そうと躍起になっていた。35万台にも及ぶ車両は商魂たくましく特別料金を徴収する

華氏95度
摂氏35度。暑い。

地元の臨時駐車場を溢れだし、道路に溢れた群衆と車列の大渋滞をさばくため、数千名の警官達が動員された。

発射場から5マイル南のバナナ・リバーにも見物のための船が押し寄せて水面を埋め尽くし、空には特別観覧席へVIPを運ぶヘリコプターがひっきりなしに往復する。

2千名の招待記者団、2万人の来賓を迎える観覧席には各国の外務大臣や科学技術閣僚、軍当局者、両院議員や実業界のリーダー達が顔を揃え、ホワイトハウスの大統領とともにその瞬間を見守っていた。同様に、世界各国のTVモニタやラジオの前では、カナベラル基地に押しかけることのできない全世界の人々が、打ち上げを中継する生放送に耳を傾け、固唾をのんで長いカウントダウンを共に数えたのである。

まさにこの瞬間、世界はひとつであったと言っている。

来るべき宇宙時代の始まりを告げるカウントが0になった瞬間、発射場を取り囲む周囲数キロを割れんばかりの歓声があたりを包み込んだ。推進剤の閃光と轟音の中、飛び立つサターンロケットの姿を追い、ほとんど雲のないカナベラルの青空を裂いて伸びる白煙を見上げて、誰もが興奮と感動をもってアポロ11号の旅立ちを見送ったのである。

「これから10年の間に、人類を月へと送り込む」――。

10年前 ケネディが演説で語った夢物語は、今日、実現への一步を踏み出した。

我々がこうしている今もお、3人を乗せたアポロは時速数千キロで地球を遠ざかり、あの空の向こうの月へと飛び続けている。往復の道程はそれぞれ4日あまり。20日の夜には着陸船は月面に降り立つ。

この挑戦は、人類が広大な宇宙へと旅立つ門出となるものだ。

地球全土になお強く残る、ロケット発射の瞬間の熱狂を感じながら、いまはただ静かに3人の宇宙飛行士が我が国の――人類の夢を果たしてくれることを願うとしよう。

◆アポロ11号月着陸船、アームストロングからの通信

— 1969. 07. 20

「ヒューストン、こちら静かの基地。——^{イグル}鷺は舞い降りた」

—— 1969. 7. 20 20:17:40 UTC

◆アームストロングの手紙(2)

— 2009.07.21

僕が最初に彼女に——信じられないことだが、間違いなく「彼女」に——出会ったのは、忘れもしない1969年7月21日。イーグルが月に降下した7時間後のことだ。着陸の興奮から寝付けないまま、僕とバズはヒューストンのミッションコントロールに予定を早める許可を得た。4時間の休息時間を繰り上げて、ミッションを前倒しして進行させることにしたんだ。

月面でのミッションはいや、月面に限らずアポロのスケジュールは、全て事前に徹底的に検討された計画に基づくもので、その時の気分や気まぐれで変更できるものじゃない。僕達はたった一度の本番のために議論を重ね、何百回と訓練を繰り返した。それでも月の6分の1の重力の中で船外活動服を身につけるのも、ハッチを開けて外に身体を引っ張り出すのも、全てに神経を使い、苦勞したよ。

……ああ、どうにも回りくどくていけないな。この上、君にまで言葉を選んでいたって仕方ないことだというのに。まったく、僕の臆病を笑ってくれないか、チェット。

そう。月のウサギだ。これが僕と彼女との、最初の邂逅だった。

おそらく、彼女は——僕達がスケジュールに基づく2時間40分の月面ミッションを進めている間にも、ずっと僕たちを監視していた。より正確に言えば、彼女は僕達が旅の3日目の夜

ミッションを前倒し
事前に可能である
か検討され、計画
されていた。休息時
間は着陸予定が遅
れた場合の予備時
間の位置づけだった
という。

に月周回軌道に近づいた頃から、接近してきた不審な宇宙船を注視していたんだろう。

もし仮に、僕の推測が正しいのだとしたら。彼女は僕達の来訪とミッシェンの状況を慎重に観察し、ミッシェンの進行状況を理解した上で、船外活動が終わりかけたタイミングを見計らって僕たちに接触を試みたことになる。

僕がそう言いきってしまうには理由があるのだけれど——まあ、今は順を追って書こう。

僕達の旅に限らず、宇宙でのミッシェンには、宇宙飛行士たちが何か怪しげな発光体を目にしたという「噂」が付き物だ。ジョン・グレンがフレンドシップ7の窓から見つけた「蛍の燐光」からはじまって、多くの仲間たちが宇宙空間で未確認飛行物体を目にしていた。

僕やマイクやバズは、それまでの20回以上の有人飛行の報告から、宇宙飛行士が経験する物理的、光学的現象を熟知していた。けれど、僕達がこの3日目の夜にコロンビアからLMの事前チェックを行った時に見つけた、アポロの前方を先導するように並走する閃光については、なんら説明する方法を持たなかったんだ。

おおよそ一時間の観察とヒューストンとの交信で、僕達はこれをLMの格納庫のパネルであると結論し、発光体がアポロに衝突する可能性が無いことを確認すると、以後その事については触れるのを止めた。この時の通信記録は、実はNASAによって今でも公開されている。

……少なくともこの時、僕達はこれを怪しげな宇宙人の乗り物だとは考えていなかった。まったく常識的な判断だ。振り返ってみれば酷い見落としだったとも思うけれどね。

彼女——と言ったとおり、月のウサギは多くの人々が想像するようなエイリアンとは全く違

フレンドシップ7

マーキュリー計画に

おける、初の有人地

球周回飛行。

コロンビア

アポロ11号の司令

船の名称。

う姿をしていた。まるで少女のようなその姿は驚くほど僕達人類に似ていたが、同時に僕の知るいかなる人種とも異なっていたように思う。年齢はおそらくハイスクールか、その下くらいだったろうか。彼女が仮にアジアや日本の生まれであるならば、もう少し年上であつたのかもしれない。

僕が彼女をウサギと断言しているのは、真つ赤な両眼と、その頭に生えていた白く長い耳のためだ。……ピーター・ラビットのような褐色の和毛ではなく、チェット、君が見せてくれた中国の千支イラストに出てくるような、真つ白で大きくて長い耳だ。それをびんと立てて、彼女は6分の1の重力の空を滑るように飛び、僕達の元へと現れた。

そう。彼女は、その身一つで月の空を飛んでいた。

あの月の上の、分厚く快適とはいひ難い宇宙服越しに、なぜそこまですぐに分かつたのかといえ、彼女が、宇宙空間で活動をするために必要なあらゆる装備を身につけずに、僕の見上げる先の、薄黄色の月の砂漠の上空に、静止していたからなんだ。

赤い目をした月のウサギは、6分の1の重力の空から僕たち見降ろして言った。

『はやく、ここからでいけ——と。』

◆アポロ11号ミッションの機密デブリーフィング

— 2009.07.28

——するとなんだ、ニール。君までアポロに並走する発光体を見たと言っただな？

参ったな、てつきりバズのジョークかと思っていたが——3人揃って我々をからかうというのは感心しないな。どうしてその時に君ひとりで結論を出してしまったんだ。バズには相談しなかったのか？ ヒューストンでは報告を受けていないぞ。

……まず第1に、僕自身どうしていいのか持て余していた、というのがある。飛行物体の正体を突き止める必要は感じていたけれど、それについて判断すべき材料が無かったんだ。

第2に、これから月に向かうミッションを前にして、それはまさしく大事の前の小事だったということになる。この段階で、それが重要なものであるという認識がなかったんだ。

——なるほど、君の言い分は確かに分からないでもない。だが、なによりも重大なミッションであるからこそ、その決断の経緯は我々も知リたかったよ。

ああ、そして、そして、だ。いいかいニール。君は、それだけでは済まなかったと言っわけだ。月への途上で未確認の飛行物体を見ただけではなく、その先にもっと驚くべき発見があったと、

デブリーフィング

作戦終了後の状況報告、事後確認。肥満は関係ない。月面から帰還したアポロクルーは、安全が確認されるまで気密室に隔離され、会話などは全て遠隔で行われた。

こう主張するわけだな。参ったね、私の覚えが確かなら、君はそんな類のジョークは好まなかったと思うんだがね。

……僕自身、これを口にして自分の頭を疑いたくなるよ。だけど月探査船の船長として、月面航行への最中に起きた全ての出来事について、報告の義務を課されている。だから僕は、僕が、記憶しているままの事実を口にしていく。

僕には、イースト・クレーターで、彼女と遭遇したという記憶があるんだ。あの、ウサギの耳をした少女と。いいかいミッションコントロール――

――OK、OK、待つてくれ。ニール。OK。大事なことだ。確かにその通りだ。

……（溜息） ああ、やっぱり僕の正気を疑っているかい、コントロール。

――ああ、まったく、にわかには信じがたいことだ。……OK、ニール、順に、一つずつ冷静に確認していこう。君たちは――君とバズは、UTC 7月20日の20時17分に月面に降下し、翌日3時に、計画を前倒しして月面ミッションを開始。あの偉大な一歩を踏んだ。

……その呼び方はあまり好きじゃないな。僕が一人の努力で到達したものではないし、一歩を

踏んで帰って来ただけのことだ。そのことへの評価は、これからのミッションでより多くの成果を持ち帰る皆に与えられるべきだよ。

——OK、その通りだ、済まなかったね。我々もあれを見て興奮したのは確かだから、赦してくれ。……ニール、イーグルが降下したあと、君たちは計画に沿って2時間40分で6つのミッションをこなす必要があった。そうしてそれらの大半が終了した活動終了時刻の10分前、バズが地質コアサンプル採取の準備をしている間、君は着陸船を離れて、東にあるクレーターへの約65ヤードの「小旅行」を行った。ここまではいいいね？

……ああ。その通りだ。

——これはもともと、予定には組み込まれていなかった行動だ。スケジュールが押している状況で、活動時間が残り10分というかなり逼迫した状況だった。このイースト・クレーターへの「小旅行」の最中に、君は驚くべき未知との遭遇を果たしていると、こういうことだね？

(肯定)

——事実ならまったく信じがたい出来事だが、その前に確認させてくれ。月面における歩行ミ

65ヤード
59.4メートル。

ッションは終了していたし、EVAでの月面における君の行動は、君自身のプログラムによって一任されていた。しかし、そもそもどうして君は活動時間の終了間際のこの時間にイースト・クレーターへ向かうとしたんだ。

ああ、そしてニール、教えてくれ。君はどうしてバズをその場に置いていったんだ？ 確かにミッションルにEVAの最中にLM周辺の活動範囲に具体的な距離制限を定めたものはないが、なるべくLMを離れてはならないというガイドラインは存在するだろう？

……クレーターの上空に、彼女の姿を見つけたからだ。いや、この時点では未確認の飛行物体と判断した。イースト・クレーターの上空を浮遊する、明らかに自然物とは思えない発光物体を観測した。その確認のためだ。

(しばしの沈黙)——OK。続けてくれ。

……僕の知識とアポロの機材では、この時点では目測するしかなかったが、目標が人間に良く似た姿をした存在であることがすぐに分かった。僕がクレーターに向かうとすぐに、目標も僕達へ向けて加速した。ああ、間違いなく彼女は単身で、月の空を飛んでいた。かなりの速度だったように思う。僕がひよこひよここと不格好に地面を跳ねている間、目標は悠然と宙返りまでして、ゆっくりと降下してきた。月の重力が6分の1であることを考えても、航空機の動作に

EVA (Extra
vehicular
Activity)

船外活動。宇宙飛行士が宇宙船の外で行う、装置や構造物の組立てや修理、科学機器の操作、サンブルの収集、写真撮影などの作業のこと。

はありえない機動だったと記憶している。そして、僕がクレーターに辿り着くとほぼ同時、彼女は僕達に警告してきたんだ。

——待ってくれニール。それは、君に対して通信を行った者がいたという事かい？ ……その、クレーター上空の『彼女』が、君へ交信を試みた？

……ああ——うん、言葉にするのは難しいが、そういうことだろう。

——おいおいニール、はつきりしてくれ。君らしくないぞ。

……わからない。上手く説明できないんだ。少し考えさせてくれ。

(しばし沈黙) ……すまない。どういう理屈かは分からないが、確かに彼女の声が聞こえたんだ。月に降りた僕達へ向けた、警告だった。ただちにここを立ち去るようという内容で間違いない。

——それが君の言う月のウサギと言うわけだな。ふむ。誰か他にも、今回のアポロミッションに、世界一有名なビーグル犬が同行していた事実を聞いていたものはいないかい？ (一同笑)

ミッションコントロール、ありのままを報告する。僕はウサギのような姿をした少女と、月面で遭遇し、警告を受けたんだ。これは不法侵入であり、直ちに出ていくようにと。

なるほどな、プレイボーイは月にも販売店を出していたのか。そいつは驚きた（一同笑）。君たちは宇宙基準の成年に達していなかったからお引き取りを願われたわけだな。

すまない、コントロール。僕自身、自分の記憶に自信がないんだ。……バズはどう報告しているのか聞いてもいいだろうか。彼も僕と同じく、彼女の警告を受けているはずなんだが……

——あー、ニール、いいかいニール。非常に言いづらいことだが、いまさっきバズにも同じことを確認した。彼は、そんな記憶はないと断言したぞ？

【内部指示】

アームストロング飛行士の精神状態および記憶に混乱が見られる。一時的なものと思われるが、要経過観察。休息の後改善が見られないようであれば処置も必要と判断する。

◆アームストロングの手紙(3)

— 2009.07.21 —

そう言えば、中国の神話では月に蛙と兎がいるんだというのを教えてくれたのも、チェット、君だったろうか。君の幅広い知識はエセックスの狭い船室での旅を、とても豊かなものにくれた。当時あそこに居た連中は、僕を含めていかに早く、いかに上手く飛行機を飛ばすことしか考えていない奴らばかりだったから、君の話は本当に新鮮だったんだ。

チェット、もし君が彼女に、あの時の月面で僕の代わりに月のウサギに出会っていたら、君はどうしただろう。案外、僕よりもずっとうまく、彼等と国交を開いていたかもしれない。

あの時起きた全てのことは、僕達の理解できる範疇を大きく超えたものだった。月のウサギとの遭遇なんて、当然ながらNASAの誰も想定していないものだったからだ。……まあ、宇宙人との邂逅がまったく考慮されていなかったわけではないけれど、地球外知的生命体との接触は、もっと違う形でなされるものだと考えられていた。

彼女達は僕たちがあの38万4000キロの彼方の星に降りるために学び、訓練し、積み上げてきた常識を、全ての知識と経験を覆す、有り得ない存在だった。

だから、あの時バズの取った——取ろうとした行動は、決して責められるものではなかっただろう。僕が彼女と相対した直後に、少し離れた場所に居たバズも彼女の存在を認識した。彼

はすぐさま行動に移った。

バズは、彼女をアポロミッションを乱す障害と認識し、その排除を試みたんだ。

知つての通り、バズ・オールドリンは僕よりもずっと優秀な軍人で、すぐれた戦闘機乗りだった。君や僕達のいたあの戦場で、彼は愛機のF-86Eセイバーを駆つて何度となく敵機と遭遇し、2機を撃墜している。月の上空を飛来し、僕達に敵対意志を見せる月のウサギは、間違いなく僕達に害を与える「敵機」だった。

……結果としてバズの行動は果たせなかった。まず、僕達が着陸船で月に持ち込んだ資材はそのペイロードからとても限定されたもので、その中に敵対存在を撃退するための十分な装備はなかったからだ。

けれどバズがそれを実行に移せなかったのは、手段がなかったからじゃなく、それを封じられてしまったからだ。彼女が僕達を、そのガネットのような美しい紅い眼で睨んだ途端、バズは意識を失つたように棒立ちになつて、動かなくなつてしまったんだ。

そしてそれは僕も同じだった。彼女の一瞥で視界が輝くような赤に染まり、僕は指一本動かせず、身動きもできなくなつていた。

——この時僕は、本当に心臓まで停まつてしまったのかもしれない。

驚いたことにこの数分間の間、あらゆる通信も機能を喪失していて、イーグルの前で起きた彼女と僕達の会話は、記録には残されていない。

ただ、彼女の赤い目がひどく寂しげで、綺麗で、美しい色をしているのだなと思つていたの

F-86セイバー
ノースアメリカン
社が開発した第二世
代ジェット戦闘機。
空対空ミサイル（サ
イドワインダー）の
有用性を示し、19
50年代初頭より
アメリカ空軍の主
力戦闘機として配
備された。

を覚えていろよ。

通信が回復し、僕達が正気を取り戻した時、気付いた時には彼女の姿は無くなっていた。
僕の耳には、彼女が再度告げた警告が――

「月から出ていけ」という言葉が、はつきりと残っていた。

◆アポロ11号ミッションの機密デブリーフィング

— 2009.07.28

——ニール、昨日はよく眠れたかい？ 昨晩は存分にコックが腕をふるったそうじゃないか。

……ああ、腹も膨れてぐっすりだ。彼には是非、ホワイトハウスからの直通通信でねぎらいの言葉を送ってやってほしいね。

——OK、よしニール。毎日同じことの繰り返しで済まないが、もう一度、最初からいつものやつを確認しよう。恐らくこれは極めて重大な問題だ。そのためには正確な記録が必要になるだろう。いいかい？

……ああ。構わない。

——ミッションの3日目、コロンビアは謎の発行体と遭遇し、その翌日、船外活動中の君はクレーター上空で、未確認の飛行物体に遭遇した。まったく信じられないことだが、それはウサギの耳をつけた少女の姿をしていて、月の住人である事を主張した。君は彼女からアポロミッ

ホワイトハウスからの直通通信

アポロが月面に着陸してすぐ、ニクソン大統領が地上との交信に割り込み直接彼等に長々と祝福の言葉を述べようとしたため、秒刻みのミッションには大いに混乱をきたした。

ションを——今後一切の月探査計画を止めるように警告を受けたと、こんな具合になるわけだ。
さてニール、なにか訂正はあるかい？

……いや、それで合っているよ。参ったな。どう喋っても僕の気が触れたとは思えないな。

——まったくだ。さて、彼女はもうやって君にそれを伝えてきたのかについて質問しよう。君たちが我々に内緒で着陸船に通訳を同行させていたと報告は受けていないからね。よく思い出してみてくれ、ニール。銀河連邦の公用語に英語が含まれているのなら、我々人類は実に幸運だ。今後の加入交渉は大変スムーズに進むことになるだろう（笑）。

……ああ。……そうだな。言葉ではなかったかもしれない。頭の中に直接、声が響くような感じだったな。……船外活動服には通信以外の集音機能はないし、月の大気は音を伝えるには不十分だ。通信を傍受するなどして割り込んだ可能性はあるかもしれないが……。バズに確認したいと言ったのはそういう理由だからだよ。

——OK、了解だニール。では次にその少女の——

（遮って）ミッションコントロール、僕が正気を失ったと考えているかい？

——おいおい、何を馬鹿な事を言い出すんだ。しっかりしてくれニール。君は11号のミッシェンの責任者なんだ。着陸船を往復させただけで店じまいにされちゃ溜まったもんじゃない。まだまだ山ほど仕事は残ってるんだぞ？ 君に離脱されちゃチーム全員、徹夜続きた。

……正直、僕も自分の記憶に自信がないんだ。この上でバズが覚えていないと言うなら、まず僕は自分の頭を疑いたくなる。僕はアポロのクルーとして、あの場で起きたことをそのまま報告しているつもりなんだ。それが常識で考えて、いかに荒唐無稽で馬鹿げたことであっても。……ミッシェンコントロール、答えてくれ。僕はどうすべきだろうか？

（沈黙）

……僕がこのことを主張すればするだけ、僕達が月へ行ってきたという事実の信憑性が薄れてしまうだろうか？ 恐らくそうだろうな。普通に考えて、僕が見たのはただの幻覚だ。まったく月のウサギなんて馬鹿げた話で、常識で考えればそんなこと有り得ないとわかる。本当に月に誰かが暮らしているなら、これまでのミッシェンでその痕跡を見つけられないなんてことはあり得ない。

(沈黙)

……君達と立場が逆なら、僕だって何をふざけている、まじめにやれ、と言っだろう。
教えてくれ、コントロール。僕はどうすべきなんだ？

(しばし沈黙。この後、録音は途絶する。以後の記録は残されていない)

◆アームストロングの手紙(4)

— 2009.07.21

あの時何が起こったかについて、バズに問い正す機会は2度あった。そのどちらとも、彼はそんなことには何も覚えがない、と答えるだけだった。おそらく僕の頭が少しおかしくなったと考えたか、あるいはそんな事があるわけがない、と心から信じていたか、どちらかなんだろう。

……けれど、後になって、バズは必要以上に強く、自分が月を歩いた宇宙飛行士なのだという事を主張するようになった。あるいはあの時の出来事が彼をそうさせているのかもしれない。それがバズの記憶に残っていないのだとしても。

イースト・クレーターでの邂逅は公式に存在しなかったことになり、僕の行動は単純な科学的興味によるもの。僕達が3日目に見た発光体は、剥離した宇宙船の外壁や、未知の宇宙に飛び出した時のストレスが見せる幻覚だ、という結論で片付けられてしまった。

はじめのうちは熱心に発光体の話をしていたバズも、その説明ですっかり納得していたようだった。——まあ、彼も本当に宇宙人がいたと思ってた訳ではなくて、自分の見た不思議な現象の正体を明らかにしたただけなんだろう。もつとも常識的な判断だと言えた。

これ以降、僕はできる限り、このことを口外しないように努めてきた。必要な分の報告はしたが、それによってアポロミッションに大きな変更が行われることはなかった。実際、多くの

公式に存在しなかったことに
NASAの公式見解は「この件についてはノーコメント」というもの。

スタッフは僕のことを、月面到達に関連して頭がすこし混乱しているのだろうと考えていたようだ。僕の神経が参っていることを知ったコントロールは、十分な休養を取らせることでそれが解決できると思っていたのだろう。

まあ、人類として初めて月の地面を踏んだ飛行士たちが、月の光にやられて帰って来たというのは、色々と困るだろうことは想像がついたよ。月で宇宙人を目撃したなんて、ゴシップにしたってたちが悪すぎる。

実際、バズがこの事を覚えていないというのが真実なら、僕が記憶を保っていた理由がわからない。ただの偶然か、何かしら僕に残る要因があったとでもするしかないだろう。あの時月に降りたのは僕とバズの二人きりで、その一人が覚えていないというのなら、それから何度と続くアポロミッションの遂行のため、どちらが口を噤むべきかは明らかだった。

……やれやれだ。久しぶりの手紙だって言うのに、随分と愚痴ばかりになってしまった。君も呆れているかな、チェット。

だけれど、僕もここまでの話だけであれば、今更蒸し返して手紙を書くと思えば立つこともなかったし、君を煩わせることなどせず、月への旅の途中で起きたささやかな不思議として生涯、沈黙を守ることを選んだつもりだ。そのほうが、僕は平穩無事な人生を過ごせただろう。わずかなばかりの僕の経歴にも、余計な傷を残さずに。

——けれど、そうはいかなかったんだ。

◆アームストロングの回顧録

— 1969.07.25

月面を歩いた僕達12人のその後について、知りたがる人々はそれなりに多い。人生において希有な経験をした僕達が、その後をどう生きたのかは、確かに人々の興味をそそのめるのだろう。映画なら僕が月面から帰還し、家族やクルーと再会を果たした感動のシーンで、最高の盛り上がり之余韻を残して終わるのだろうけれど——残念ながら人生はそんな銀幕の終わりのように途切れない。

1969年7月24日。月面からイーグルを発進させ、マイクの待つコロンビアへ戻った僕とバズは、再び38万4000キロの旅をしてウェーク島東の海へと帰還した。少しばかりの休暇とデブリーフィングを終えると、僕達3人は家族を伴って全世界に自分たちがしてきたことの喧伝をする旅に出発した。1年以上に及ぶ凱旋ツアーで、僕達はどこでも例外なく英雄のように扱われ、何度も何度も同じ質問を繰り返された。

一方で、身内のスタッフはまるで、手のかかる大きな子供たちの機嫌を損ねまいとするように僕たちに接してきた。バズは何度か、その扱いに耐えかねて爆発し、滞在先のホテルや繁華街で騒ぎを起こした。とは言え、この事で彼を責める気にはなれない。僕だって内心うんざりしていたからだ。

僕がNASAを退職したのは、この扱いに辟易してしまったからだというのは、ある意味で正しいかもしれない。表舞台を去り隠棲してしまった僕を、世捨て人のように無責任だと囃し立てるマスメディアも多かったが――ジャネットの負担を考える限り、これが最良の選択だったのだと今でも信じている。彼女は聡明な女性だったけれど、「偉大なる英雄」ムーンウォーカーの伴侶として、公私の区別なく高潔で思慮深い「アポロクルーの妻たる理想の女性像」を何年にも渡って強いられることには耐えられなかったらう。

それから僕は幸運にして、故郷であるシンシナティの大学に教職を得ることが出来た。もつとも、それも僕のファーストマンとしての知名度に助けられたことは確かだろう。ただ月を歩いたというそのことだけで不当に僕の地位が高められてしまうのは本意ではない。

僕の授業を受けにくる学生達の中には、サーカスの動物を見物するのと大差ない気分で作ってきた者もいただろう。このころ、僕は取材をできる限り断っていたから、彼らに紛れてやってくるタブロイドの記者も少なくなかった。

おかしいものだ。僕が月に行っていたのは1969年のある時期のほんの一週間ばかりのことだと言うのに、皆の興味は皆そこにだけ集まっていて、いつまで経つてもその話ばかりを聞きたがる。僕がそれ以外の事を知らないと思いついて、僕が若い頃に飛行機に夢中になったことや、軍の退役後に超音速機のテストパイロットをしていた話を始めると、驚いたように質問をする生徒が後を絶たなかった。

ジャネット
ジャネット・アーム
ストロング。ニール
の妻。

◆アポロの使者の素顔 連載第7回

— 2001.10.11 —

先の連載で、アポロ11号ミッションに挑んだクルーの不仲……特に、月着陸船の操縦士、バズ・オルドリンと船長、ニール・アームストロングの間にあった溝について触れた。

問題に対してすぐに行動を取ろうとするバズと、困難の前に立ち止まって熟慮し、時間をかけて決断するニール。彼らを知る多くの者たちが、二人がまるで噛み合わない、まったく違ったタイプの専門家であったことを回想している。

空軍軍人らしく経験と勘に基づく人間の性能を信じていたバズは、派遣先のMITで航空制御の手動操作に関する博士論文を書いて教授らと対立し、当時すでに主流になりつつあった機器の電子制御を軽んじる姿勢を、担当教官や論文の査読者から指摘されている。

一方でニールは、完全な実地訓練の不可能な月面での着陸船の発着について、コンピュータを用いたシミュレータによる訓練がなによりも重要と考え、自らそのプログラムの構築や制御に携わり、長い時間を割いている。後に地上でも月着陸船を模した訓練機が完成し、それを用いた操縦訓練も開始されたが、コストのかかる実機訓練に比べて気軽に行え、さまざまなミッション状況設定も可能なシミュレータはアポロ計画に携わる宇宙飛行士達に広く愛用された。これもまた、二人の違いを端的に現したエピソードだろう。

彼らの不仲を語るにあたつて外すことができないのが、月への一番乗りを巡る論争である。

バズ・オールドリン飛行士にとつて、自身が「ファーストマン」であるか否かは、非常に大きな興味と関心を引くに十分なことだった。陸軍航空隊のパイロットであつた父を持つオールドリン少年は、一家の一人息子として優秀な成績を期待され、何よりも「一番」であることを強く求められて成長した。厳格で気難しい父に応えんとしたバズが、人類初の偉業をニールに先んじられ、二番手に甘んじることを苦々しく思つていた可能性は十分にある。

事実、着陸船が月面に降下した後、二人がどの順番でタラップを降りるかという手順が発表された時、バズは憤りを隠そうとしなかつたという。

エドワード・ホワイットの宇宙遊泳以降、宇宙でのミッションにおいて船長は宇宙船に残り、もう一人のパートナーが忙しく動き回ることが常識だった。そのため、着陸船の操縦士に選ばれたバズは最初に月面に降りるのはもちろん自分であると考えたのだ。だが、ミッションコントロールが発表したのはその逆であり、月への第一歩を最初に踏むのは船長であるニールの役目となつた。

この手順の根拠はごく単純な理屈である。着陸船が月面に降下した時、船内で出口のハッチに近い位置に座っているのはアームストロングであるから、彼が先に月へ降りるのが合理的であるというものだ。

様々な計器の詰まつた狭い着陸船の中でバズがニールをまたいでその位置を交代するのはかなり難しい作業であり、貴重な月面での時間を無駄に使うものだったのだ。

エドワード・ホワイ
ト
ジェミニ4号のクル
ー。アメリカ人初の
宇宙遊泳を達成し
た。

この決定に対し、バズははじめ、自分が軍人であるから「民間出身者」であるニールに先を越されたのだとして苛立ち、次には自分とアームストロングの着席位置を、着陸船降下後に入れ替えるのは非常に簡単だという説を作り上げた。彼は大量の図面やグラフや統計資料を持ち込み、ところ構わず同僚を捕まえては月モジュールから最初に降りるのは船長ではなくパイロットの自分であるべきだと主張したという。これはミッシェンを統括するスレイトンや、他のクルーを辟易させ、メンバーの一部から齟齬を買った。

また、バズの父であるジーン・オルドリッジもこの決定を不服として、彼の友人である軍関係者や政府高官を通してNASAやペンタゴンに働きかけた。これと関係あるかは不明だが、当時の有力紙の紙面には、アームストロングが船長の特権を利用して月に降り立つ最初の人間になろうとしたのだという記事が確認できる。

しかし、当のニールは月に降りる順番などまるで頓着せず、シミュレータの開発とLMの調整に忙しい日々を送っていた。チームとしての不和を囁かれ、「親しげな他人」という不名誉なあだ名を拝領しながら、ニールはバズを蔑ろにする言動を一度たりとも見せていない。彼ら二人のどちらが同僚達の信用を集めていたかは明らかであり、NASAでの二人のすれ違いはその実、一方的なバズの空回りであったと言ってもいいのかもしれない。

そして月からの帰還後、二人の立場は一変した。

まるで隠者のように故郷に隠棲してしまったアームストロングとは対照的に、バズはアポロ11号のクルーとして、人類で初めて月面に降り立った人物であることを事あるごとに主張する

スレイトン

ディーク・スレイトン。有人宇宙船センターの宇宙飛行士事務所長であり、宇宙飛行士選抜の責任者。

ようになる。彼の自著や講演会、出演したTVドキュメンタリー、フィクションの中には、自分が月面歩行者であることを大々的に示す肩書が溢れている。彼は、自分こそがアポロ11号の代表者であるかのようにふるまいはじめたのだ。

その証拠と思われるものが、アポロ11号の月面ミッションを記録した数百枚近い写真の中に確認できる。この写真の中で、「ニールがバズの姿を写したものは数十枚に及ぶが、「バズがニールを写したものは、彼が偶然バズのヘルメットの反射に映り込んだ一枚を除いて、まったく存在していないのである。

これについてバズは、ミッションを優先することが必要であつたため、ニールが写っていないのはただの偶然だと説明しているが——バズが月面に降りたもう一人の宇宙飛行士の存在を抹消してしまうとする意図を感じるのは筆者だけであろうか。

世界で二番目の月面歩行者バズ・オールドリンは、何らかの理由で沈黙を選んだニール・アームストロングにとって代わり、30年という年月をかけてアポロの英雄としての名誉を独占しているように思えてならないのである。

◆アームストロングの手紙(五)

— 2009.07.21

1973年6月末。僕はその日——久しぶりにケープ・カナベラルを訪れていた。表向きは大学の仕事での出張という事になっていたけれど、実際は溜まっていた休暇を整理するためのものだった。

1972年のクリスマスを前に、ジーンが月に別れを告げて、当初の予定よりも3機早く、アポロ計画は打ち切られた。このプロジェクトで月を歩いたのは、不幸にして幸運な事故に見舞われた13号を除く、6回のミッションで計12人。僕は幸いにもその一人という立場を得たことになる。

38万4000キロを行き来する旅を打ち切ったのが、神の啓示や宇宙戦争の始まりではなく、予算の不足と見栄を張り合う相手がなくなったからだというのは、事実であるけれど締まらない話だ。

僕達がイーグルを着陸させてからわずか数年で、宇宙開発に関わる風向きは大きく変わってしまった。人類が月面に立つことがゴールだという風潮はまったく誤りであり、アポロ計画の本義はそうではないのだと、僕は、何度か慣れない講演の場で主張してきたけれど——いくら人前に出ても、多くの観衆は僕の「偉大なる一歩」ばかりを取り上げて、それだけをもって月

ジーン

ユージーン・サナ
イン。アポロ17号
の船長、アポロ計画
最後の月面歩行者。
アポロ10号にも同
乗している。

探査計画のラストシーンとしてしまったらしい。

事実、11号に続くアポロの船外活動ミッションが次々と大成功を収め、素晴らしい研究成果を持ち帰るようになるのと反比例するように、多くの人々は輝かしい宇宙時代の到来に熱狂したことも忘れ、アポロミッション自体への興味を失っていった。

太陽風組成実験装置の設置による荷電粒子の測量、月面での本格的な化学実験、地球の6分の1の重力下での砂丘^{デューン}走行^{ベギン}車の操縦、月面の地形の測量、地質学のスペシャリストによる月面土壌サンプルの採取——多くの素晴らしいミッションが、世間ではすべて月旅行の取るに足らないおまけのように扱われていた。

彼らをもう一度熱狂させるには、火星の表面に人類を送りこんでみせることくらいしか方法が無かったんだ。その事が叶わなかったのは、君も知つての通りだろう。

そうして、わずか3年でこの発射台は役目を終えた。

月へ向かうサターンロケットの射的台という役目を失い、かつての喧騒が嘘のように静かなケープ・カナベラルで、空つぽの発射台を眺めていると、ひどく胸が痛む思いだった。夕焼けの中、東の空に昇る月を見上げて、あれが僕の行ってきた場所なのかと不思議に思い、なんだけ長い夢を見ていたのではないかと錯覚してしまうほどだった。

短縮されたとはいえ、アポロの全てのミッションは与えられていた多くのプロジェクトに成果を上げ、計画は全て円満に完了していた。

それでもなお、僕にもう一度月に行きたいという気持ちが無かったと言えば嘘になる。この

素晴らしいミッシ
ン
順にアポロ14号、
15号、16号、17号
の成果。

日、サターンのない空っぽの発射台を眺めに行こうとしたのは、そんな寂寥の念を感じたかったからかもしれない。

——そんな、役目を終えたかつての宇宙への玄関口で、僕は「彼女」と再会した。

ケープ・カナベラルの冷たい路地裏。うずくまるように身体を抱え込み、「彼女」はひどく薄汚れていた。真冬に裸で放り出されたかのように震え続け、焦点の合わない目は無惨なくらい真っ黒に濁り、半開きの口元はぶつぶつと呂律の回らない単語を垂れ流す。美しい毛並みの長い耳は焼けただれ、根元で短く千切れていた。

あの月の上で太陽の反射光を浴びて白く輝き、6分の1の重力の空を滑るように飛ぶ、穢れなき少女の姿は、見るも無残に変わり果てていた。

路地裏の彼女は僕をゆっくりと見上げ——濁った赤い眼を血走らせ、痛む耳を掻き耄り、悲鳴の混じった絶叫を上げながら、胸の前でしっかりと握りしめていた拳銃を、僕に向けた。

……この時ほど僕は、お上品な教官殿に血反吐を吐くまで叩きこまれたはずの、『武器を持った相手への対処』の役に立たなさを呪ったことはない。

もう10年も前に軍属を離れていたのだから仕方のないことだと言い訳をしてもいいかもしれないが、あの時僕が晒した醜態を、ビーチャム少佐にでも知られたら、僕は相当にきつい一発を拝領することになるだろう。

ビーチャム少佐
アーネスト・M・ビ
ーチャム。アメリカ
海軍初のジェット機
のみで編成された
戦隊、VF-51の指
揮官。海軍時代のア
ームストロングの上
官。

真つ赤な眼に焦燥と憎悪を滲ませ、錯乱して僕に飛びかかって来た彼女の強張った指から拳銃をもぎ取るまで、僕はそれこそアポロが月に降りる時の何倍も緊張し、死を覚悟していたと思う。

彼女が拳銃の安全装置に気付かずにくれたからこそ、僕は拳銃に立ち向かう勇気を奮い立たせることができた。

これが僕の、月のウサギとの二度目の邂逅だった。

◆フロリダ警察への盗難事件報告

— 1973.06.28

発生地点：〇〇通り236A ジョン・マクレーン・シニア氏邸宅兼店舗

発生時刻：June, 28 at 0:30p.m. ~ 1:40p.m.

被害詳細：

本日14時過ぎ、買い物より帰宅したマクレーン夫人によって、自宅兼店舗が荒らされているのが発見された。雑貨店を営む店舗のカウンターと奥を隔てる強化ガラスドアが施錠ごと破損しており、犯人はここから侵入した模様。防犯ベルは作動しておらず、店内で店番をしていたアルバイト店員が気絶しているのを見て当所へ通報した。

盗難にあつたのは主人が護身用に所持していた自動拳銃 M1911A1 二丁、実包 60 発。金庫及びレジスター内の現金には被害なし。

事件当時店主は不在であつた。気絶していたアルバイト店員の記憶には混乱が見られ、事件当時の状況は明瞭ではない。不審者の姿は確認できていないとのこと。店内の防犯カメラは作動していたが、映像はノイズが酷く判別不明であつた。整備不良のため故障したとみられる。

現在、周囲の目撃情報、付近の不審者を確認中。

M1911A1
大型自動拳銃、コルト・ガバメント。アメリカでもっともポピュラーな銃のひとつ。

◆アームストロングの手紙(6)

— 2009.07.21

僕が彼女を取り押さえてすぐに、彼女は意識を失った。極度の疲労と緊張で、自我も保てないうくらいに神経をすり減らしていたのだろうことは、医者でなくても明らかだった。彼女をどうすべきか——途方に暮れた後、僕は誰かに見つからないように慎重に、彼女をホテルの部屋に連れもどった。

途中でそれをボーイに見られた時は肝を冷やしたが、チップを大量に渡してこの事を口外しないように言い含めるくらいしか出来なかったよ。

ああ、誤解のないように断わっておくが、誓って僕は二心を持っていたつもりはない。僕はジャネットを——妻を愛していたし、今でもそれは変わらない。

いずれにしても、当時の僕があまり家に戻る事も出来ず、仕事に追われていたのは良い事だったのだろう。どんな理由であれ、同じ部屋に少女と寝泊まりしていることを知られるのは、控えめに見ても褒められたことではないはずだからね。

……あらためて、彼女の有様はひどいものだった。

ホテルの部屋に戻ってすぐ、意識を取り戻した彼女は、傷付いた耳を押さえて再び錯乱し、意味不明の事を叫んで暴れはじめた。武器が——さっきのコルト・ガバメントが無い事に気付

くと、今度は部屋の隅にうずくまって、たすけて、ころさないで、と繰り返すばかりだった。僕はそれから丸二日、隣の部屋に音が伝わらないよう祈りながら、真つ赤に濁った目で僕を睨み、罵り、散々に叫んで暴れ続ける彼女をひたすらにだめて、おとなしくさせることに掛かりきりになった。

……本当に、よく警察に踏み込まなかったものだと思うよ。

僕は彼女に殺されないよう、また、彼女が自分自身を傷つけないよう、目隠しをし、その手足を縛りあげねばならなかった。……舌を噛み切らないようにするために口も塞いだけれど、彼女はそれを噛みちぎり、シートで作ったその場凌ぎのロープなど容易く引き裂いた。危機的状況にある人間は常軌を逸した能力を発揮することがあると言うけれど、これはそんな理屈で片付けられるものじゃない。やはり彼女は、普通の人間ではなかったんだ。

彼女はすっかり錯乱していて、自分がどこに居るのかも、僕が誰なのかも、正確には判別はできていなかったようだ。彼女の長い耳は遠く離れた仲間たちとの通信を可能にするものであり、それを失った彼女は誰とも話のできない状態であつたらしい。その不具合はノイズのようにラジオやTVの電波を拾って混信し、彼女を苦しめていた。

包囲、殲滅、作戦行動。

敵機、迎撃、撃墜。

攻撃、援護、爆撃支援要請、砲撃。

ぶつ殺す。死ね、みんな死んじまえ。

助けて、いやだ、死にたくない。もういやだ。だれか、助けて。死んだ、みんな死んだ。逃げられない。もう嫌だ。死にたくない。もうころしたくない。

……殺して、誰か、お願い。はやく、ころして。

精々聞き取れたのはそれくらいだ。酷い頭痛に苦しみ悶え彼女が、うわごとのように口にす
る単語の多くは僕の知らないものだった

僕には見えず、聞こえない恐怖に泣き叫んで暴れる彼女は、とてもまともな状態とは言えな
かった。ただ目の前の脅威を吹き飛ばすためにありつたけの暴力を行使しようという、戦場の
地獄で精神を擦り切れさせた兵士の取る行動だった。

兵士。……そう。彼女は——月の国の軍人だったんだ。

彼女のわずかな所持品の中には、見たこともない素材の階級章と、怪しげな注射器と、アン
ブルを詰め込んだポーチ。そして、おそらく自決用と思われる薬の錠剤。

彼女はおそらく決死隊で、死の恐怖と隣り合わせを日常にすることを強制された、酷い扱い
をされていた。傷付いた耳のせいでひっきりなしに恐慌と錯乱を起こし、激痛と恐慌で意識を
失い——数分もするとすぐに覚醒し、また助けて死にたくないと思える。その間にも、彼女は
酷い幻覚と幻聴に悩まされているようだった。

罵声、悲鳴、僕の知らない名前を叫び、ひたすらに赦しを請う声。

きつとこの時、彼女はまだ一人、僕の知らない過酷な戦場に取り残されていたんだろう。そこで彼女は絶望的な戦力差に追い詰められ、膨大な敵勢力に包囲され、自分を見捨てた友軍を呪う罵声に耐え、死にたくないと呼び敵を皆殺しにせんとわめく。そうして嗚咽を堪えながら、苦しむ味方の頭と胸に銃弾を撃ち込んで、発狂せんばかりに頭を掻き毟るんだ。

僕は彼女の過去を、彼女が見せる幻覚で垣間見た。彼女の紅い眼は、他人を狂わせる不思議な視線を使うことができたんだ。月の上で僕達の記憶を失わせたのも、きつとこの力によるものなんだろう。

定期的に襲ってくるひどい頭痛と吐き気でベッドを台無しにし、せつかく包帯を巻いた耳を掻き毟り、叩きつけた頭で壁にも大きな穴を開け――。

そのうち、僕は彼女の恐慌の原因が薬物の禁断症状によるものだとすることに気付いた。彼女が震える手で荷物にあったアンブルを奪い取り、首筋に注射しようとしたのを見たからだ。似たような姿になった兵士たちを、僕は少佐に引き連れられたウォンサン湾の戦場で目にしていた。きつと彼女がいたのは、僕達よりもずっと酷い地獄だったんだろう。

月がどんな所なのか、僕には想像することしかできないけれど――まだハイスクールにも届かないような少女が、ここまで酷い姿にならなければならぬ理由などないはずだと、そう思った。

◆カナベラル・ホテルへの元従業員への聞き込み

— 1974.02.16

はい。そうです。私がアームストロング氏の依頼でそのレディを部屋に運び込みました。

かなりのチップを渡されましてね、この事を口外しないようにと言いつけられましたよ。

ええ、ホテルで働いていると、結構こう言う事はあるんです。……え？ 警察に？ あははは、無論それも考えましたけどね、経験上、こういう時に警察の方をお呼びするのは、事態を悪くさせることがほとんどなんですよねえ。訳アリでホテルに滞在されてる方も沢山いらっしゃるわけですね。

たとえばですね、国際指名手配中の某ギャング組織の大物さんがほら、あのビルの最上階スイートにもう4年もいらつしやるってのは、有名な話ですが——だからって、ホテルがその事を警察に通報したりはしないでしょう？ あの時も同じだったとは言いませんけど、そういうものなんですよ、私たちの仕事はね。お客様こそがまず第一なんですよ。

まあ、その結果クビになつてちゃ面白くもないんですが。……あ、ここ笑うところですよ？ そもそも呼び止められた時はその人があのアームストロング氏だなんて知りませんでしたからねえ。身なりは良かったし、ご婦人の方も——まあ、娘さんにしては似てないなと思つてましたが、どんな方とお会いしようが私の知ったことじゃありませんし、連れの具合が悪いから、

休ませてほしいと言われたら手伝いますよ。景気良くチップも頂きましたしねえ。

え？　へえ、アームストロングさんってご結婚されてるんですか。お子さんも3人？　うー

ん、まあそりやそうでしょうけど、知りませんでしたねえ。宇宙飛行士なんて妙な——失敬、大変なお仕事されてるんですから、てつきり独身なのかと……。

ええ、それから何度かね、私が選ばれたのは偶然でしょうけど、顔を覚えて頂いたんでしょうね。着替えの服やお食事などを運ばせて頂きました。毎回結構なお礼を頂いて……仲間内からは上手いことやったと言われましてねえ。ははは。

あ、はい。ええ、何度か。たしか上の階のお部屋から、物音が響いてうるさいってクレームがありましたねえ。下の階は私の受け持ちじゃなかったんで知りませんが、最初の何日かはなんだかドタバタしてたみたいですね。……まあねえ、不審に思わなかったかって言われるとねえ……うちくらいのホテルなんて、ちよつと特殊な趣味の新婚さんが滞在して、一週間も籠りきりでお楽しみ……なんてこともある訳じゃないですか。まあ、慣れですよ、慣れ。

その後もずうっと静かだったわけじゃないんですが、血相変えて部屋に飛び込むほどではなかったですねえ。お連れ様が神経を患っていて、ときどき軽い錯乱をしているとか——まあそんな感じで説明しまして、お部屋を変えることで納得していただきましたよ。ああ、嘘じゃないですよ？　アームストロング氏からもそんな説明を受けてましたし。

そうそう、迷惑と言えば服の一式とか、引き裂いたシャツとかの処分を頼まりましたつけ。あのジャケットはどうも、オイルみたいなもので汚れてたような気がしますよ。なんですか、

火薬っていうか、薬品みたいなへんな臭いもしましたしねえ。見付からないように廃棄してくれてことで、バスローブと一緒にゴミに出しました。

……え？ そりやまあ気にはなりましたけどねえ、ホテルの9階まで往復して、ちよいと御用聞きをするだけで1000ドル貰えるとなったら、本当にまずいと思うまではやめられないでしょう？ 何しろ私、その時あの人の事を多分「その筋」の人なんだろうと思ってたくらいで。警察に通報したって私の懷にや一銭も入ってきませんし、感謝状なんかもらったところでもーナスも出なきや腹も膨れませんしねえ。場合によっちゃ、あのホテルの従業員は客の秘密を言いふらすんだなんて噂になって、利用客が減ることだってあるわけですよ。

まあ、一週間で給料の5倍は稼ぎましたからねえ。もうちよつと大事に取っておけばよかったと思いますよ、まったくねえ。こうして路頭に迷うこともなかったはずで。ははは。

そうですねえ、あまりお出かけにはならなかったですねえ。朝と晩に買い物に出るくらいであとは大体、お部屋の中に居たような気がします。そう言えば医者を呼べるかについて聞かれましたんで、ホテルの主治医が居るって話は一通り。私は呼ばれなかったのどうだったかは分かりませんねえ。大体そんなところですよ、私の知ってるのは。

……はい？ 空軍基地で戦闘機が墜落？ 怖いですねえ、事故なんですか？ え？ ミサイルが自分に命中して墜落？ そりやまたなんとも間抜けな……はあ、レーダーが狂って、ですか。それで、それがいったい何の関係が？ え？ はあ……はい、忘れますよ、もちろん。

戦闘機が墜落

1973年6月20日、ムグ島で新型ミサイルの搭載試験をしていた最新型の戦闘機F-14トムキャットが、自身が発射したミサイルに墜落された。原因不明。

◆アームストロングの手紙(7)

— 2009.07.21

彼女の容体が落ちてきてきたのは3日目のことだった。

意識を失っている時間が増えたことで、少しでも身体が休まったためか——彼女はようやく、自分の現状を理解し、僕が誰なのかも認識できるようになった。もちろん日に何度も幻覚や幻聴に悩まされるのは変わらなかつたけれど、少なくとも話をできるくらいには。

彼女の名は「レイセン」といった。……そうだチェット。君も知らないはずがない。あの日本のゼロ・ファイターの名だ。

その名前の通り、彼女は月の軍人で、その身一つで空を飛ぶ空軍の兵士だった。長い耳を立てて僚機と通信し、隠れ潜んだ敵を索敵し、狂気を呼ぶ赤い瞳で照準を定めて銃弾の引き金を引く——戦闘機乗りだったんだ。

レイセンは僕達がアポロに乗って月へ降り立ったあの日、自らが属する月の軍隊の決死隊として、月にやってきた愚かなる侵略者——僕達の事だ——を迎撃するために出撃したという。

……ああ、チェット。これを読んで君は、いよいよ僕の頭がおかしくなったかと思っていることだろう。僕と彼女が、38万4000キロを隔てた月面とケープ・カナベラルで、こうして二度も出会うことになったなんて、一体誰が信じてくれるというんだろう。

彼女が本当に月から来たウサギで、真実を語っているのか、あるいは何かの具合で正気を失ってしまった哀れな少女なのか、正直に言えば僕には判別がつかなかった。あまりに荒唐無稽過ぎていたし、信じろと言われる方が難しい。あの月での邂逅だって、ほんの数分の間の出来事だ。けれど彼女の語る言葉は、僕にとって疑うには重すぎた。

彼女達、月のウサギは、地上の人類が月へ侵攻してきたと考えていた。

どうにも理解したいことだけれど、彼女達をはじめ月の住人は、自分達の事をとて高貴で優秀な種族であるという尊大な考えを持っているらしい。彼等は地上を穢れに満ちたおぞましい場所だと考えていて、僕たち地球人を卑小で穢れた、争いばかりしている愚かな蛮族だと決めつけていた。

……困ったことに、僕にはあまり反論できなかったよ。

チェット、君の教えてくれた中国の神話では、月は罪を犯した者達が追いやられる、流刑地のような場所だったように思うけれど——彼女達の考えはまるつきりその逆だった。月の都は選ばれた者たちの住む楽園で、死や争いとも無縁の理想郷なのだという。彼女の様子を見ている限りは、どうにもそうは思えなかったけどね。

実際、レイセンも本当に餓えて渴くまで、僕の用意した食事や水に一切手を付けようとはしなかった。僕の料理の腕はお世辞にも上手とは言い難いだろうが、デリカテッセンのサンドイッチやホテルのルームサービスですら。月のウサギにとつて、地上の食物を口にするのは、自分から穢れを身体に取り込む事に等しく、汚物を食べるようなおぞましい行為らしい。

彼女達にとって、アポロミッションは地上の民たちの増長の果ての暴挙だった。

地上に住む穢れた民が、同族同士の争いに明け暮れて少しばかり慢心し、いつしか万物の霊長などと増長して天上の樂園までも自分たちのものにしようと思ひ込んでいたのだと——レイセンはそう思い込んでいた。きつと彼らには、僕達アポロの着陸船がその尖兵に見えたのだろう。

アポロ11号での僕とレイセンの会話は、月と地上の最初の遭遇戦となるはずのものであったらしい。

けれどレイセンは、月を攻めてきた地上の兵器が、あまりにもみずばらしいのに気付いて、心底拍子抜けした。月のウサギ達は寛大に温情をみせて、僕達への対処を警告にとどめ、アポロを撃墜することはせずに見逃してくれたのだという。

彼女達にしてみれば、無知な野蛮人がみずばらしい丸木舟で大陸の岸に乗り付け、ほんの数エーカーの土地を歩き回ってここは自分たちの国だと宣言し、自分の国の旗を立てて悦に入っている——そんなふうに見えたのかもしれない。

礼儀も知らない子供の、他愛ない戦争ごっこだ、1回くらい大目に見てやろうと——そんな気分だったのだろう。

けれど、僕達のミッションはそれだけに留まらなかつた。アポロ計画は順調に進行し、次々に月着陸船が月面へと降り立った。僕達はそのたびに月に侵略の旗を立て、我が物顔で月の領土を踏み荒らしたのだ。

それがどれほど彼女達にとって無礼なものだったのかは分からない。コロンビアード砲を持

コロンビアード砲
ジュール・ヴェルヌの
SF小説「月世界旅行」で主人公たちを
月へと打ち上げる
大砲。アポロ11号
の司令船の名前の
元にもなった。

たない僕たちは、それまで一度も交流を持った事がなかったのだから。

月のウサギ達の怖れをさらに助長したのが、6回のアポロが持ち帰った月の土壌サンプルだ。彼女達は、月に星条旗を立てた野蠻なる地上の民が、ブラックジャックを掲げた海賊のようにその占有権を主張し、穢れなき月の大地を残らず削り取って、ロケットに積んで持って行ってしまうのだと思つたらしい。

多くの人々はこの考えを幼稚だと笑うかもしれないが、天地のないあの広大無辺な宇宙で、足場を失うという事がどれだけの恐怖かを想像すれば、彼女達の恐れが決して大げさではない事は分かつてもらえるだろうか。加えて、彼ら月のウサギ達の目には、僕達はそんな愚行でもためらいなく実行するような蛮族に映つていたのだ。

ついに僕達を看過できなくなった月政府首脳部によつて、それ以上のミッションを阻止するための特殊部隊が組織され、次々に行動を開始した。俄かには信じがたいけれど、13号のミッションが事故を起こし、月に辿りつけずに終わったのは、その時派遣された月のウサギ達の特殊部隊の工作によるものだという。

僕達のプロジェクトを阻止するべく派遣されてきた長い耳の工作員達が、いまもこのケーブ・カナベラルやヒューストンには多く潜伏しているのだと、レイセンは長い逡巡の後に話してくれた。

……おそらくこれは大変な決断だったはずだ。彼女にとつては故郷を裏切る行為であつたし、軍事機密の漏洩に当たる重大な犯罪だったのだから。

そして彼女は逃亡兵であり、軍規によつて処断されねばならない立場にいた。

レイセンの記憶が錯綜していて、その経緯ははっきり知る事は出来なかったが——彼女はその反攻作戦の最中に前線を逃亡し、地上へと逃げ出してきたらしい。

彼女は、いま自分がここに居るのは僕のせいだと考えていた。もう何百年と平和だった月の都を踏み荒らした最初の人間——全てのきつかけとなつたのが、僕なのだと。そう考えていた。だから彼女は僕を探していたのだと言う。

いまだ続こうとしている、月と地上の戦争を、止めるために。

◆アームストロングの手紙(80)

— 2009.07.21

なんだかこの手紙も随分と長いものになってしまった。便箋もインクもすっかり無駄遣いしている上に、回りくどい事ばかりで本当にすまない。チェット、君にはいくら感謝してもしきれない。もうすぐ本題だ、あと少しだけ付き合ってくれないだろうか。

レイセンと過ごした時間は、さして長いものではなかったように思う。実際、僕がそれほど長い間、彼女との生活を秘密にしておけるとは思えなかった。ホテルに滞在していたのはせいぜい1週間という短いものであったはずだ。……振り返ってみるに、そんなわずかな間とは思えなかったけれど。

有り体に言って、レイセンはあまりにも軍人に向いていない。投与されている薬物の影響もあるのだろうが、彼女はひどく内向的で、感情を露わにするのが不得意で、自虐傾向が強く、ほとんど内罰的でした。チームでのミッションで皆の脚を引っ張り、最初に【不適格】の評価を受けるタイプだ。月の軍が人材不足なのか、性格を考慮して教育を施すことをしていないのかもしれない。

レイセンの話によれば、ほかに大勢の月のウサギ達が恐怖心を薬物でねじ伏せられて、最前線へと送り込まれていたという。月のウサギが皆、彼女のようなというなら、とても残酷な

話だ。僕が彼女を害さない事を理解してなお、レイセンは酷く人目を気にしていた。たまに水を飲み立つ時すら、僕の顔をずっと窺うほどだ。

彼女は正気を取り戻してからもガバメントを片時も離そうとしなかった。たとえ偶然でもホテルの中で発砲事件なんて起こされるわけにはいかず、僕は妥協案として、弾倉を空にすることで彼女を宥めることにした。

できることなら、止めさせたいとも思った。憔悴した少女が拳銃を握り締めてまじろむ姿はあまりに痛ましいものだったからだ。

満足に眠ることもできずに、悪夢にうなされてすぐ目を覚まし、血が滲むほどにガバメントを握りしめて、ここにはいない敵を探す。レイセンが逃亡兵だったことは前にも書いたけれど、彼女にとってここはあくまでも敵地で、信用できる味方はどこにも居らず、助けを求める相手もいなかったのだろう。

短く千切れた耳を掻き毟つてうずくまり、泣き出すのは——彼女が薬物の後遺症らしき幻覚に悩まされる合図だった。あまり上等とは言えないホテルの壁越しに、あらぬ噂を（この場合、全くの嘘ではないが）立てられるのはかわない。

ホテルや隣室の住人にどう説明したものかと頭を抱えたが、不思議なことに彼らは何も言っではこなかった。後で聞いたところによると、レイセンは自分の存在が気付かれぬよう、音や光の波長を弄って、迷彩を掛けていたらしい。彼女はこうした能力に長けていた。

レイセンはずっとまじろみとも夢ともつかない中で、僕の知らない名前を呼んでは、彼らに

許しを求め、詫び続けていた。母なら、彼女を教会に連れていくべきだと強固に主張しただろう。あるいは僕は、誰かにこの事実を知られることを覚悟してでも精神科の門を叩くべきだったのだろうか。

……いずれにしても、月から来たというウサギへの対処として、それは良い方法とは思えない。僕はただ黙って、彼女が落ち着きを取り戻すのを見ているだけだった。

レイセンの精神が幾分落ち着いている時は、僕たちは月と地球との異文化交流に努めた。お互いの事を知っておくのは、相互の利益になるからと考えたからだ。多く、戦争はお互いの無理解が契機になって引き起こされる。僕は、月のウサギとの再会の機会を無駄にしたくはなかった。彼女達の意見を尊重し、立場を理解し、交流に努めなければならないと思った。

僕たちのプロジェクトがどうして静かの基地へ降りることを決めたのか、あの奇妙な船体には何を積んでいたのか。月の政治体制や住人達の暮らし、文化はどんなものなのか——僕とレイセン、お互いの興味は尽きなかった。

僕が一番時間を割いたのは、アポロミッションが決して月を侵略する意図を持っていなかった事を説明する事だ。上層部がどんな思惑で僕達の船外活動ミッションの限られた時間に星条旗を立てることを含めたのかはさておき、僕にもバズにも、月面を占領してやろうという意図はなかったからだ。

少なくとも僕には、我らが合衆国の政治的スタンスを代弁する資格はない。

けれど月の裏側の、僕達には観測できない場所には彼女達の暮らす都市があり、ウサギ達を

統治する国家があるという。彼等は今も地上の人間達が月を侵略することを危惧し、恐れ、阻止のための軍隊を派遣する準備を進めているという。

これをすぐにでも然るべき部署に報告すべきかどうか、僕はためらった。僕は既にNASAの人間ではなかったし、そもそも真面目に報告したところで、まず馬鹿にされるか僕の正気が疑われるだろうことが明らかだったからだ。

チェット。たまにニュースになっているから、君も耳にしているかもしれない。

このころ、アポロ計画に携わった宇宙飛行士たちが、月を往復するという大きな冒険の後、奇妙な行動をとって話題になることは決して珍しいことではなかった。実業家や議会でキャリアを積んで政治家を目指すのではなく、神の声を聞いて新たな信仰に目覚めてしまったり、深遠なる宇宙からのコンタクトを受けて人類を偉大なるステージへと昇華させるために勤しんだりしているかつての仲間がいる。

彼らの名譽のために言っておくと、決してそれは彼らの人格や経歴に問題があったからではない。良くも悪くも、月へ向かうという一大プロジェクトの中で注目され続けるという事が、皆にとって想像以上にストレスになりうるものだったからだ。バズだつて、月から戻ってしばらくは寝込んでしまったくらいだ。

……ああ、そうだ。チェット。僕はこれを悔いている。

これこそが僕の過ちだ。月面歩行者として恥ずべき行いなんだ。

僕は、そんなふうに、科学を手放した彼等と同じように見られるのが怖かった。それだけの

理由で、僕はレイセンの振り絞った勇気を踏み躪ってしまったんだ。

何が偉大な一歩だろう。僕は、38万4000キロを離れたあの空の上まで辿り着いておきながら、すぐ隣にうずくまり泣いているレイセンに、手を差し出す事すらできなかった。

彼女達、月のウサギの存在を伏せ、あの月で僕が見聞きしたことを全て、なかったことにしてしまったことを、彼女達の勇気に報いなかったこと、僕は今も後悔している。

きつと、2度目に僕に出会うまで、レイセンは僕を憎み、恨んでいただろう。誤解からとはいえ、最初に彼女達の領土を踏み荒らしたのは僕達だ。それが引き金となって起きた戦争で、彼女は月を去ることになった。

彼女はいつもその事で自分を責め続けていた。味方を裏切り、友人たちを見捨てて前線を逃亡した、卑怯者だと。

——けれどレイセンは、その苦しみを乗り越えて、僕を探し、地上への忠告をしてくれた。このまま人類が月への侵略を続けるなら、月のウサギ達はなおも抵抗を続け、月へ向かう口ケツトにはさらに深刻な事故が起けると僕に教えてくれたんだ。

……僕はその事を、誰にも伝えなかった。

僕は知っていたんだ。僕達が彼等の月を脅かす可能性は、もう当分……おそらく、この先数十年に渡って、存在しないことを。

◆宇宙開発年鑑・1990年代総括

— 1997.06.07

東西の冷戦構造をそのままに、それまでお互いに向けあっていたミサイルの照準を宇宙へと合わせ、月を標的にしたロケットの射的競争は、ソユーズN1ロケット実験の失敗、アポロ計画の成功によって我等が合衆国の勝利に終わった。

世界中を過熱させたこの一番乗り競争に勝ち、アポロを月面に命中させることに成功した我が国は、急速にその熱意と興奮を失っていった。

一刻も早く人類を月にと熱狂し、11号の発射準備が進むたび、些細なニュースに一喜一憂していた人々は、人類初の偉業を果たす英雄が帰還するとあつさりとその事を忘れ、新しい娯楽に夢中になった。

1969年をわずかに数年過ぎただけで、アポロはその計画を短縮。予算を縮小され、12人目の月面歩行者——ユージン・サナーンがかの地を離れたのを最後に、月へ飛ぶはずだった17号以降の3機は永遠にカナベラルを飛び立つ事はなくなったのだ。

こうして世界の宇宙開発は、より遠くの惑星へ人類を送り出すことを諦め、より地球に近い周回軌道を舞台に、形を変えて進められていく。

◆あるIRCチャットルームのログから抜粋

— 2002.03.08

>>D.vadar

まったく馬鹿げてるね。アポロと地上との交信記録は全てNASAの情報公開によって明らかにされてるじゃないか。あんたが根拠にしてる「宇宙船発見」の交信記録つてのは全部ガセだ。適当に通信を切り貼りして作った捏造なんだよ。

>>B.Bat

同意。てかさ、この通信、そもそもアームストロングしか喋ってないのがおかしくね？ 月着陸船にはオルドリンも乗ってるだろ。船長がこんなに興奮して喋ってるのに、オルドリンが黙ったままとか不自然すぎるだろ、常考。

>>wizman

知ったか乙。バズは軍関係者なんだから黙ってて当然だろ。民間出身のアームストロングが知らされてなかっただけ。当時のクルーの関係が陰悪だったのは有名だし、チーフのスレイトンが人類初の挑戦にそんな人間関係のメンバーを送り込むとかはありえないのはわかるよな？

それでも強行させたのはバズが特殊任務を受けてたからだ。あとな、普通に考えてNASAが自分に都合の悪い通信を公開するわけないだろ。情報操作を鵜呑みにしてる馬鹿ども乙。

>>D.vadar

顔真つ赤にして反論するのはみつともないぜ。この通信は「巨大なクレーター」を目撃したものを編集してるだけ。原文はログにリンクがあるから見ろ。どこにも「スペースクラフト」なんて文字はない。

>>GHOST

あのさあ……。それ公式がノーコメントって言うてるんでしょ？ 隠蔽工作バレバレじゃん。そもそも人間は月になんていつてないからさあ（笑）。

アポロの月面活動の映像って、全部ハリウッドで撮ってたつてのは常識でしょ。映像のトリックとか全部証明されてるし。

←ここ参照ね♪

<http://www.XXXXXXXXXX.html>

>>Zeek

おっと、陰謀論者のおでましですか。

>> D.vadar

映像のトリック（笑）ってなんだよ。ワイヤーで吊り下げるとか早回しとかのカビ臭い説まだ主張してんのかよ捏造派は。また一人馬鹿発見しちゃったぜ。
当時、何億人がリアルタイムで中継映像観てたんだけ？ それを誤魔化すとか不可能だろ常識的に考えて。第一、これが軍事機密ならもつと徹底的に隠蔽されるんじゃないやね？ 素人のサイトに載るわけないだろ。

>> GHOST

へえ、生中継だったの？ まだ誰も行ったことない月で、生中継してる間に宇宙服が破れちゃって、宇宙飛行士がバーンって爆発しちゃうかもしれないの？ 笑えるー。それこそ常識的にスタジオで別撮りしてたって普通考えるよねえ。

>> Luna

国のプロパガンダを鵜呑みにしちゃってるお前らに質問。アームストロング様の偉大な一歩（笑）の映像ってあるじゃん。あれどうやって撮ったわけ？ 人類が初めて月に降りる映像を、どうやったら外から撮れるのか教えてくれよ。不思議だよなあ？

>>wizman

それで論破したつもりになってるならお粗末だな。月着陸船の脚にはカメラが設置されてる。実物大模型が公開されてるからそれを確認しろ。現地で月着陸船の映像を中継する予定がある状態で、カメラの事を考えない馬鹿はいない。お前の反論は低レベルすぎる。

>>Zeek

打ち上げに携わったスタッフや飛行場のバイトまで含めて何万人っていたんだぞ？ あれから40年も人間騙し続けるのにどれだけ金がかかると思ってたんだ。ロケットの打ち上げだって現場で100万人以上が見てるし。

>>GHOST

馬鹿？ 月ロケット打ち上げるよりはよっぽど安いでしょ。信用させたいならもう一回行ってみなよ。あ、別に火星じゃなくても、月でいいからさあ。40年も前にできたんでしょ？ 今の進歩した科学があるなら簡単じゃない？ ねえ、ほら、はやくしてよ？
ほーんと、できないくせに口だけは一人前にわーわー騒ぐんだよねえ、こういう奴らって。

>>suzuki

地球のロケット発射でも事故があるのに、発射場も整備士もない月面で、ぶつつけ本番でい

きなり着陸とか無茶でしょう。月に着陸したあとで、また重力に逆らって打ち上げるのは当時の技術では実現不可能ですし、アポロ13号に至っては故障した後に手動操作で軌道を修正して帰還したんですつけ？ 地球は動いてるんですよ。それなのに今の携帯ゲーム機よりもしょぼいコンピュータとアナログ操作で？ やらせに決まってますね。

>>B.Bat

去年の講演会でバズが、UFOに遭遇したつてはつきり語ってるぞ。

>>GHOST

UFO！ ソースはどこですかあ（笑） つてかそーゆう話題が出ちやう時点でアポロが月に行つてないつてはつきりわかるんだよねえ。はい論破ー！

なんか隠蔽派の連中、最近だらしないなあ。適当な証拠ばかりになつてるじゃん（笑）

D.vadarとか言う寒いハンドルの奴も逃走しちゃってるしー。

>>D.vadar

講演会の話はアポロが月に行くまでに見たつていう発光体の話だろ。そつちは反論出たはず。ログ読め。いまの話題は月面での話だから一緒にすんなよ。話題そらしとか工作必死だな。

あとGHOSTとか言う奴つぎい。こっちはそう言う話をする場所じゃねえんだ、消えろ。

>> Wind Priestess

そうでもないんじゃないですか？ 宇宙船に遭ったつてのは同じ事だと思えますけど。

>> GHOST

あー、こいつら無知すぎて話になんないから時間の無駄です。さっきからでまかせばつかで証拠一つ出せないしねえ〜♪

>> D.vadar

絡んできたのお前らだろうが。思考停止しやがってクソが。

>> suzuki

データにお詳しいのがご自慢のようですが、望遠鏡写真で月面にあるはずのアポロの着陸の痕跡が見つかっていないという説にはどういったご意見をお持ちでしょうか？ あのイカサマ星条旗も、どこかに行って行方不明だそうですね？

◆アポロとUFO　宇宙飛行士への突撃取材

— 2005.01.28

またその質問か。……もう十何度目かになるな。アポロの『未確認飛行物体』については、あれから四半世紀を超えてなおいまだに取り沙汰されるわけだ。実に腹立たしい。

NASAはアポロ計画で宇宙人とコンタクトを取っていたのだ、月面開発計画を諦めたのもそのせいだのは、まったく噴飯ものだ。——酷いものになると、宇宙人から撃墜の警告を受けたとか、月面開発に関する協定を結んだというものまである。

NASAに国家の政策を左右できるだけの権限があるなら、もつと政府の弱みを握って予算をぶんどって来て欲しいものだ。

ここに居る記者諸君には繰り返してきたことだが、「UFO」という単語は特に宇宙人の乗り物を意味していない。空飛ぶ円盤という言葉が、文字通りフリスビーのような物体を示しているのと同じように、その時点で正体の確認できない飛行物体は、全てUFOだ。

誤解がないように繰り返すぞ。未確認の飛行物体は全てUFOなんだ。ここを間違えるな。

我々が「アポロの中から正体を確認できない飛行物体を見たのか」と質問されれば、答えはYESだ。——いいか、念を押しておくがここだけを切り出してアポロクルーが宇宙人と会っていたなどと、下らん結論を記事にするなよ。いい加減メディアの対応にはうんざりしている

んだ。諸君らの中にそんな短絡的な発想に走る粗忽者が居ないことを信じたい。

アポロの探査窓から見える物の大半は、小惑星の塵や水蒸気だ。しかし、それが確実に何であるかを観察以外の方法で確かめる手段は存在しない。アポロ11号には月面探査以外の船外活動は予定されていなかったからな。

結論から言えば、我々が確認したこの未確認飛行物体は、アポロの船体から切り離れたLM格納庫の外部遮熱板である可能性が高い。しかし、それを確定することは船内からの観察だけでは不可能だった。故に我々はそれを未確認の飛行物体だと報告したんだ。

講演会やインタビューでこの「未確認飛行物体」について訊かれるのはあまり好きじゃない。正直、本当にうんざりしている。このことをいちいち説明しなければならないからだ。

我々がこの件について話を聞いたがる連中の何割かは、UFOと宇宙人の円盤が別物であることを知った上で、なんとしてもアポロクルーの口から「アポロの乗務員が空飛ぶ円盤を見た」、「NASAは宇宙船と接触していた」ことを引き出そうとするんだからな。

我々はプロフェッショナルとして、ミッシェンの経緯を出来る限り正確に、主観を除いて報告しなければならぬ。アポロ11号の航路で未確認飛行物体を見たのかという問いに対しては「YES」だ。真面目に答えるのも馬鹿げているが——宇宙人の乗り物と遭遇したのかと言えば、これは明らかに「NO」となる。……以上だ。

◆州立図書館、開架書架 「宇宙の不思議について、その秘密と解明」

面白い事に、多くの宇宙飛行士が宇宙に出ている間にこの「光の玉」という未確認発光体を目撃しているのだ。

では、彼等が見たものは本当にUFOなのだろうか？ これについてはNASAの医療チームが興味深い回答を出している。地球を離れ月へ向かおうという、人類初の挑戦——そのような宇宙飛行士の緊張や興奮がある一定以上に達すると、彼等の多くは同様の「発光体」を観測するという結果が報告されているのだ。そして驚くべきことに、この発光体は目を閉じていても確認できるのである。

……では種明かしといこう。

皆さんも経験がないだろうか。ホラー映画を見た後に、灯りを消したリビングのコート掛けや、ソファの陰に、怪しげな殺人鬼を見つけてしまうことが。身も蓋もなく言ってしまうえば、彼らの目撃した光はこれと同じ原理である。

重大な責任の伴うミッション、それもアポロ計画の場合はそのほとんどが、クルーにとつて前知識や経験のないに等しい未知の領域への挑戦だった。この状況下では緊張や不安によって起こる心理的な抑圧によって、ありえないものを見てしまう閾値が変化し、何もない場所にす

ら未確認飛行物体を『発見』してしまうのだ。
地上から何十キロと離れた場所、人類の新たな一步という重大なミッションに臨む極限状態において、長時間の活動を続け、異変に備えて神経を尖らせている彼等は、本来ないはずの異常すらも察知してしまったというわけである。

飛来機は、
電磁波を放射して、
人間の目には見えないが、
特殊な装置で検出可能。
その目的は不明。
一応、説明は済ませる。
R. Usami 2034.6.8-

◆アームストロングの手紙(9)

— 2009.07.21

僕がレイセンと顔を合わせたのは全部で3回。そのうち話す機会を持てたのは、2度目のケープ・カナベラルの路地裏と、3度目のシンシナティのバス停でだけだ。そのいずれも、お互いの価値観の異質さを埋めるのに十分な長さとは言えなかった。

とくに3回目はほんの僅かな時間の邂逅だった。

彼女が突然ホテルの部屋から姿を消して——半年が過ぎた頃だろう。前触れもなく僕の職場近くのバス停にあらわれたレイセンは、驚く僕をよそに短い挨拶と感謝を述べ、この国を離れるという事だけを告げた。どこに行くのかを聞くことはできなかった。今にして思えば、もう少しでも、彼女の事を気にかけてやれなかったのかと考えることが悔やまれる。

僕は母のように神を信ずるという事に必要以上の価値を見いだせない人間であるが、どうか彼女の前途に祝福があるよう、願わずにはいられなかった。僕たちのように熟練のミッシヨンバックアップを受けて月に降り立ち、マンハッタンで400万人の歓迎を受ける事は、彼女には望めないのだから。

彼女と彼女の同朋であるという、月のウサギ達には、それから一度も出会っていない。

11号の機密デブリーフィングでの経験以来、僕が月の上で経験したことは、死ぬまで秘密に

していなければならないのだと、これまで努めて、そう考えてきた。

……けれど、それは本当に正しかったんだろうか。

僕が黙っていた事で、彼女の存在は、月のウサギ達の国や、彼女達との戦争は、誰にも知られることなくアポロの栄光の影に葬られた。

レイセンと同輩のウサギたちは、この地上から存在すら失われてしまったんだ。

分かっている。月のウサギなんて僕の妄想だった。重大なミッションで少しばかり神経が参っていただけだ。僕はアポロクルーとして、宇宙開発に携わる者として、そんな馬鹿げたことを主張するわけにはいかなかった。

そういうことに、なってしまうている。

……もう分かるだろう、チェット。僕が長い間隠棲し、世間からできるだけ逃れようとしていたのは単に、自分が奇異の目で見られることを恐れていただけなんだ。

レイセンは卑怯者なんかじゃない。勇気ある、誇り高き月のウサギだった。僕は彼女の決断に報いるどころか、その決意すらなかったことにしてしまったんだ。

そうだ。……僕こそ、臆病者で、裏切り者なんだ。

40年の歳月によって、アポロが月に行った事を信じない人々が増えていったように。

月のウサギとの出会いを否定する事で、レイセンと、その仲間達を殺してしまったんじゃないのかと。そう思えてならないんだ。

——尊敬するスリム。

僕が月を歩いて35年が過ぎた。はじめて大西洋を横断したあなたの言うように、僕は長い間、月を歩いた偉業を誇ることなく、シンシナティで世捨て人のように過ごしてきた。それはおそらく正しい事であったのだろうと、いまは確信している。

僕の沈黙に対して、ファーストマンとしての重責を放棄するものであるとか、合衆国の誇りを傷つけようとしているといった非難が多くあり、それに伴う人々の狂奔は混乱や問題を引き起こした。それに対する回答として、あなたが50年前に見出した沈黙という結論は、やはり正しかったと思う。

やはり僕たちは、少しばかり有名になりすぎたのだ。僕は僕達のミッションをテラ・インコグニタに足跡を付けた事ではなく、果てない探求へのマイルストーンを刻んだ事として評価していたつもりだが、世の中の人々は広大な宇宙に比べれば隣家でしかない38万4000キロをゴールと見ているようだ。

あなたはおそらく僕の感じた苦悩や憤りを50年前に感じ、同じことが僕にも起こる事を見越して、SETPのパーティ会場で僕に隠棲を勧めたのだろう。そのことを何度も感謝したこ

SETP
実験テストパイロッ
ト協会。

とをここに伝えたい。何もかもがあなたのように上手くいった訳ではなかったけれど。

今日、宇宙に携わるかけがえのない命が、再び失われた。もう二度とあつてはならない悲劇だった。STS-107 ミッションで事故を起こしたスペースシャトルが、かつての僕達を乗せた船と同じ名前だった事に、悲しみを覚えずにはいられない。

……今度の事故調査には僕は呼ばれないことだろう。すでに僕の知識は今の時代に即したものでないし、僕がファーストマンである事が、何もしなければ整然と動く多くの正常な判断を邪魔してしまう。

もはや宇宙開発などは時代遅れの、カビの生えた骨董品だと、そういう批判がある。30年という年月と莫大な予算をかけても、地球の上空を回って戻ってくる程度のことも満足にできない、未熟な、幼年期を脱することのできない技術なのだと。

多くの宇宙飛行士の夢である、ISSの建設にも多くの反対意見が上がり、そんなもので予算を無駄にするなら、もっと福祉を充実させると叫ぶ人たちもいた。

新たな宇宙船を建造することもできず、欠点の明らかになった骨董品を修理してだましましたまし使う他に手段のないシステムを改められず、限られた予算しか与えられない中ではどうしようもないことかもしれない。

けれど、いまの宇宙開発の袋小路を招いてしまったことに対して、僕の取続けた態度がその一因であるかもしれないと考えてしまう事を止められずにいる。

遅まきながら、僕は再び人類は月に立つべきだと声を上げるようになったが——若者達の中

STS-107

スペースシャトル・コロンビアによる28回目のミッション。

地球への再突入時に空中分解事故が起こり、クルー7名は全員死亡した。

ISS (International Space Station)

国際宇宙ステーション。計画、予算は当初より大幅に縮小された。

には、他の天体に向かう宇宙船などというものはSFの中だけのフィクションで、現実の宇宙船は地球の軌道上を回ることくらいしかできないお粗末なものだと、本気で信じている者が少なくない。30年も昔に、人間が月に辿りついた事を真実と認めない人々が、いまやこの国の3割以上を占めている。その事実は、僕にはとても重く感じられる。

スリム。80年以上が過ぎてもあなたの業績はけっして否定されることなく、多くの航空機が世界中の空を行き来し、わずか数時間で大陸どうしを結んでいるというのだ。

……失敬、すこし気弱になつていようだ。どうにも心臓を悪くして以来、嫌なことばかりを考えてしまう。これではジャネットにも愛想をつかされるわけだろう。キャロルはともよくやつてくれているし、ジャネットを責めるつもりもないが——彼女達にはいつも迷惑をかけてばかりだ。

けれど僕は考えてしまう。僕がもう少しあなたの忠告に背いてでも、多くの人々が期待するように、皆の前でファーストマンとしてふるまい続けていれば、世間からもう少し鼻持ちならない奴と思われる代わりに、もつと多くの後輩たちを宇宙へと旅立たせてやることのできたのだろうか？

僕やジーン、バズの活躍を見て、宇宙飛行士になろうとした子供達に、アポロ11号の船長が38万4000キロの彼方への旅の詳細を語らずにいた事は、月への行き来に真摯であろうとした僕の同僚たちに無用な負担を強いていたのではないかと、考えてしまう。

僕は、人生の大きな問題に遭遇するたび、いつも立ち止まって悩み、考えをめぐらせ、時間

をかけて判断してきた。後悔のないように、その時にもっとも正しいという判断を下せるように。そうして考え過ぎた挙句に答える機会を失ったことも一度や二度ではない。

……頭で考えてばかりの人間は飛行機乗りにならない。X-15のテストパイロットの時代には、あなたの同輩である爺様がたに良くそうやってどやされたものだ。スリム、あなたも僕のことをそう思っていたらどうか？

バズが僕をあまりよく思っていないかったのは、こうした資質が欠けていたからなのかもしれない。

スリム、あなたはご存じだろうか？ 先日バズが起こした暴力事件を。彼は、まったく突然に聖書を持った男に襲われ、自分は月に確かに言ってきたと、聖書に誓ってみると詰め寄られた。娘を連れていたバズが回答を避けようとする、彼はバズを嘘つきの卑怯者と罵り、カメラを回して一部始終を録画しようとした。バズはそれを押しのける時に、彼に怪我をさせてしまったんだ。

僕はその後彼に会う機会があったけれど、事件から随分過ぎた後でもバズは相当興奮していて、久々に会った僕にも叫んだ。あいつはとんでもない奴だ。——と。

実は僕も、同じように糾弾されたことがある。『世界中の誰もが、お前は月に行っていない事を知っている。それなのに、どうして認めないのか』——とね。彼等は僕の娘や妻にまで、同じことを誓えと詰め寄ってきた。

ここまで大事になることはそう多くはないけれど、これまで僕は何百回も冗談めかして――

X-15

ノースアメリカン社
開発の高度極超
音速実験機。ロケッ
トによる機体制御
は後のスペースシャ
トル開発の基礎と
なった。

時には半ば以上本気で、月に行ったことが真実かどうかを訊ねられている。

バズが起こしてしまった事件については痛ましいことだし、月面歩行者としてあつてはならないことだったと考えている。けれどそれでも、本当に月に行ったことがあるのか、嘘だ、間違いに決まつている。出鱈目を言うのを止めて、月に行ったことがないと正直に認めろ、と繰り返して問われることは、とても苦痛だ。

わずか1週間ばかりの月への冒険話だけを繰り返して、僕の人生のゴールとするのはナンセンスだろう。けれど、あれは僕だけの名誉じゃない。あの全てのミッション——そして今も続く宇宙開発ミッション全てに繋がる人々の名誉だ。僕の沈黙は、彼らの名誉を守ることができたのだろうか？ 宇宙に憧れる子供たちが夢をかなえられるよう、その背中を押すことができたのだろうか？

長い間、僕はバズを、かつとなりやすく、自己顕示欲が強く、公の場でもつい余計な事を口にしてしまう人間だと評価していた。

彼はファーストマンになれなかった事で僕を恨んでいたと、そう評価している人たちもいる。けれど今、こうしてアポロからの月日を振り返って、彼こそが月を歩いた人間として正しい行動をしていたのではないかと思えてならない。

いや、あるいはバズ・オールドリンこそ、この35年間ずっと孤独に、押し寄せる反発などものともせず、『正しき資質』を貫いていたのかもしれない。

スリム。この頃、やけにあの頃の夢を見るんだ。あの日、1969年7月20日の夢を。

地球を離れて4日。狭いコロンビアの中で、熟睡していた僕は目を覚ます。実際はミッションの緊張と準備でほとんど眠れていなかったはずなのに——そこではマイクとバズがもう起きだしていて、僕の寝坊をからかう。そして、探査船の小さな窓から砂と埃にまみれた、クレーターだらけの天体を見下ろして、もうすぐあそこに着くぞ、イーグルの準備をしようじゃないか、ニール——と、笑うんだ。

……月というのは古くから狂気の象徴であるとされてきた。僕をはじめとした月面歩行者たちは、誰よりもそこに近く焦がれ惹かれ続けて忘れられず、ついにその上を歩いた12人だ。こうして地球に戻って35年が過ぎた今も、僕達の心は、あの38万4000キロを隔てたあの天体に奪われたままなのかもしれない、そう思う。

敬愛するスリム、セントルイスの翼、チャールズ・リンドバーク。

あなたは、懐旧と共にパリの灯を夢に見たことはあったのだろうか。もういちどあの瞬間をやり直したいと、かつての未踏をもう一度目指し、間違いなく自分はそこに居たのだと、叫んでやりたいと思ったことはなかったのか。

どうか、未熟な僕に教えて欲しい——

チャールズ・リンドバーク
愛称スリム。大西洋
単独無着陸飛行、北
太平洋横断飛行に
成功したアメリカ
の飛行家。妻は女性
飛行家で作家のア
ン・モロー・リンドバ
ーク。

◆NYタイムズの記事・26面

— 2012.08.07

アポロ11号の船長として月に「偉大なる一歩」を刻んだニール・アームストロング氏(82)が今月初めに心臓冠状動脈閉塞の手術のため入院していたことが分かった。氏は以前にも心臓発作を起こしており、病状が進んだことから手術が必要になったとされる。手術は今月初めに予定されていたが、8月5日は氏の誕生日でもあったため、一時退院を許され自宅で家族とともに水入らずの時間を過ごした。手術は8日に予定されている。

【ニール・アームストロング】

1962年にNASA(アメリカ航空宇宙局)の宇宙飛行士になり、38才の時、宇宙船アポロ11号の船長として人類で初めての月面着陸に成功。「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては大きな飛躍だ」との名言を残した。

地球に帰還後、宇宙飛行士を引退し、1971年にNASAを去った後は故郷のオハイオ州に戻り、大学教授や実業家として暮らす。

◆今も残る、月面のアポロ星条旗

— 2012.08.17

アポロ計画から40年以上を経て、宇宙飛行士たちが月面に立てた星条旗が現在でも残っていることが、NASA月探査機の撮影した画像から判明した。発表したのは映像を分析した米アリゾナ州立大のチーム。

1969〜72年に行われたアポロ計画では、月面への着陸に計6回成功しており、月に降り立った12人の飛行士たちは毎回、1本ずつ星条旗を月面に立てていた。

研究チームは月上空を周回する探査機「ルナ・リコネサンス・オービター」が撮影したアポロの着陸地点の画像を分析し、6地点中5地点で今なお残る星条旗の存在を確認した。

プロジェクトリーダーのロビンソン教授は「星条旗がまだ月面に立っていることは間違いない、月の過酷な紫外線と温度環境を耐え抜いたことに驚いている」とコメントした。

なお、人類初の月面着陸となったアポロ11号の旗については今回も存在を確認できず、教授はバズ・オルドリン飛行士（当時）の『着陸船の近くに旗を立てすぎた。あまり深く地面に突き刺す事ができず、エンジン噴射で吹き飛ぶのを見た』という談話を紹介し、おそらく旗が失われているであろうことを補足している。

◆入院中のアームストロングの発言録

— 2012.08.16

ああ……××××、すまない。

やはり、僕は君の事を黙っているべきではなかったんだ。
すまない。××××、どうか、どうか僕を……許してくれ。

——ああ、誰か。わからない。誰でもいい、お願いだ。
教えてくれ。僕は、僕達は本当に、あの月で、君と——

【内部指示】

意識レベル低下。患者の記憶に混濁あり。幻聴、幻視が見られる。
ただちに緊急措置、賦活剤投与。

◆ジェイムズ・R・ハンセンの回顧録

— 2011.11.17 —

ニール・アームストロングのファンについて語るのであれば、一人の女性について言及しないわけにはいかない。

アームストロングは彼を慕う多くのファンに対し、不公平とならないように努めてきた。いかに熱烈なファンであっても、彼は見知らぬ相手からの手紙に返事を送ることはせず、秘書を通じて、型どおりの感謝を記したメッセージを返すようにしていた。

実際、彼がファンレターに一つ一つ目を通し、その返事を書かねばならないとしたら、それだけで彼の後半生の全てが費やされ、一枚返事を書く度に何十ドルかの報酬を受け取らなければいけなかっただろう。

そんな中、彼が敬愛するリンドバークの忠告を破り、晩年になってから個人的に文通をはじめた女性がいる。彼女については多くが謎に包まれており、出自や経歴、アームストロングとの関係、いつからの親交であるのか、そもそも実在の女性であるのかも知られていない。文通でも本名を明かさず、メリーベルという偽名と私書箱を用いていたとされている。

私が断片的に知る事実を語るとするならば、アポロ計画から40年近くが過ぎ、彼が月を歩いたファーストマンであるという事が忘れ去られそうになっていた時、その事を彼に対して指

ジェイムズ・R・ハン
セン
ニール・アームスト
ロングの伝記「ファ
ーストマン」の著
者。

摘し、助言を与えたのも彼女であつたという。
つまり、この伝記の出版の後押しをしたのは——彼女であるそうだ。

親愛なるファーストマン。

私の傲慢によって起こした戦争が、
あの天上の月と栄光ある旗を汚し、
あなたの名誉を不当に貶めてしまったことを
深くお詫びいたします。

—どうか、あなたの人生に
幸いがあることを。

Merrybell Hearn

◆永遠亭の診療所に残された置手紙

師匠へ。

本日から数日お暇を頂きます。

急なわがままを言って申し訳ありません。姫様にもどうかよろしくお伝えください。
……てゐには先に言っておりまですので、里での薬の販売はあの子に任せてください。

追伸…羽衣、黙って持っていく事をお許してください。

◆文々。新聞 第二百二十八季 葉月の二

妖精達の活動が活発化している。先年の春に湖上の氷精と妖精達の間起きた小さな大戦争については既に報じたところだが、その騒動は現在も後を引いているようだ。

博麗神社周辺を活動拠点とする妖精達が、謎の妖怪に襲撃を受けたという事件の一報に、本紙記者はいち早く現場へと飛んだ。

(写真04…本誌記者の取材に傷痕を示し襲撃犯の横暴を訴える星の妖精)

被害に遭ったと主張するのは、神社裏手の樹を根城にする三妖精。常に3人で行動を共にすることで知られる彼女達だが、現場に残っていたのは黒髪の妖精S嬢(匿名希望)一人のみ。他の二人は侵入者との弾幕勝負によって「一回休み」であるという。

事件があつたのは昨日の夜半。住処に侵入していた犯人を発見した彼女達は、すぐさま警告と共に3対1の弾幕勝負を挑んだものの敢え無く返り討ちとなり、S嬢のみが一人が危うく難を逃れたとのことである。

妖怪相手に張り合う妖精など、湖の氷精くらいしか知られていないが、S嬢は意気高く、襲

撃者に対して反撃を誓う戦意の高さであった。

犯人の目的は彼女達の所有していた宝物という名のガラクタであったと思われる。

（写真12…盗難にあったとされる現場。中央が旗の仕舞われていた箱である）

現場は荒らされていたものの大きな被害はなく、彼女達のお宝箱から星条旗という名の、星と赤白の縞模様の旗が奪い去られたとのことだった。S嬢によればこれは彼女にとって重要な力の源であり、3人の持てる能力を駆使し、万全の防犯体制を引いていたというが——正直妖精のレベルでそれが万全たり得たのか、真偽は疑わしい。

彼女達はこの星条旗に対して所有権を主張し、公平な捜査を求めているが、もともとは野山に投棄されていたものを拾い集めていたに過ぎず、これが強盗に当たるかは微妙であり正式な判断が待たれることだろう。人（？）的被害についても軽微であることから、当局は静観を決め込む模様。

また、謎の襲撃者については現在調査中である。

【新聞購読希望の方は妖怪の山、武蔵ヶ岳二本楓三三、白狼鎮台六七駐在所まで】

◆八雲藍の結界管理に関する備忘録

本日、妖怪の山西方の郡王岳、鎬沢など数カ所で結界の緩みを感じ。規模は弱なれど深度は三十を越え、短時間ながら外界との移動を可能とする空隙が生じていたと確認される。

警戒式の監視網が異常を感じしなかった理由は不明だが、なんらかの霊波干渉があったものと推測される。同様の異常が第二次月面戦争直前にも確認されている（参照…添付図一）

結界の齟齬は既に修復済み。紫様が戻られ次第、直ちに報告のこと。

【追記】

紫様よりの指示は、警戒レベルは現状を維持し、監視を続けろとの事。念のためマヨヒガに使いを出し、橙を役目に当たらせる。

◆チエットへの手紙

— 2012.08.23 —

——親愛なるチエット。

じつに3年ぶりの手紙になる。あれを最後と言っておきながら、また君にこうして手紙を書く僕を笑ってくれ。まあ、流石にもう次はないだろうから安心してくれていい。まもなく僕もそちらに行くことになるだろうから。医者はこの前の手術ですっかり回復するなどと気休めを言っていたが、すっかりガタのきた心臓がそろそろ限界なのは間違いないんだ。

カレンは元気にしているだろうか。相変わらずやんちゃで可愛らしいままだろうか。僕がこうして老いたのだから、本当なら彼女も立派なレディになっているのだろうけれど、相変わらず僕の思い描く彼女の姿は幼いあの日のままだ。

入院も初めてではないけれど、どうにもこの病院という場所は落ち着かないものだ。こうして動くこともままならず、ぼんやりと天井を見上げているのはこれで何回目になるだろう。このポンコツの心臓が本格的にトラブルを頻発しだしてから、気晴らしに飛行機にも乗れなくなってしまった。つくづく歳は取りたくないものだね。

まったく、僕ももういい加減に十分老いたということだろう。先目めでたく82歳の誕生日を迎えてしまったよ。近々また冠動脈の手術が予定されているが、それでこの老体がどれだ

け生きながらえることができるのだろうか。なにしろこうしてペンを持つ手も思うようにならないほどなんだ。一文を書くにも大変に苦勞するような有様なので、医者の忠告を無視してシートに潜り込み、こっそりとこれを書いている。いやはや、学生の時以来のやんちゃな夜更かしだが、妻が見ていたら悲鳴を上げるかもしれない。

すっかり耄碌した頭と、震えるペン先で書くこれが、はたしてきちんと君の読めるものになっているのかどうかは疑わしい。チェット、君に手紙を書き始めて随分になるが、これらが君に届かない事にどこか安心してゐる自分もいる。まったく現金な話だと思つよ。

いつもいつも、君には僕の弱音や愚痴ばかりに付き合わせてしまった。感謝してもしきれないほどだ。……ほんとうに、ありがとう。

さて、無理をしていられる時間もあまりないので手短に報告をしよう。

今日、8月23日は僕にとつて記念すべき日となった。あるいは、あの月へ降りた日よりもずっとだ。まったく実に愉快なんだ。いますぐ、世界中の人々に向けてこの爽快な気分を叫んでやりたいくらいにね。

チェット。聞いてくれ。

——彼女が今日、僕を訪ねてきたんだ。40年前とまるで変わらない姿で、けれど、ずっと自信に溢れた顔で。レイセンは今日、僕の病室を訪れてくれた。

チェット。君はこの老いぼれの頭がとうとういかれてしまったと嘆いてゐるだろうか。見舞いに來た孫を見間違えるくらいに曖昧になつてしまったと悲しんでゐるだろうか。

けれど違うんだ、チェット。レイセンは今日、本当に僕の元を訪ねてきてくれた。

そうだ。彼女は、僕の迷いを晴らしてくれた。愛くるしい、少女らしい笑顔で、僕の懊悩を吹き飛ばし、この40年、僕を悩ませていたことを、すべて一笑に付してくれた。

彼女は今、科学や現実に近いやられた幻想たちが住む、東の果ての御伽の国^{フェアランドの国}に住んでいるという。多くの仲間や、信頼できる上司に囲まれて、元気にやっていると僕に話してくれた。

そこは吸血鬼や魔女や幽霊や宇宙人が、そろって春の風を楽しみ、夏の夜に涼を求め、秋の祭礼に沸き、冬の暖炉の前で語り合い、共に酒を酌み交わす楽園なのだという。僕の畏れる死神までも一緒になって遊んでいるというのだから、楽しい場所もあったものだ。

遠くそこで僕の病状を知り、レイセンははるばる海を超えて僕を見舞ってくれたんだ。

途中で、40年前と同じように戦闘機の編隊に出くわしたとも語ってくれた。レイセンは彼等の電子兵装にも惑わされず、迷彩された通信を傍受して乗っ取り、ミサイルには誤誘導情報を流しこんで無効化してやっただし。とどめにステルスを丸裸にして翻弄し、煙に巻いて逃げてやったんだと、新しい白い耳を誇らしげに見せ、レイセンは嬉しそうに語っていた。残念ながら、僕の後輩たちはすっかり彼女に完敗したようだ。

そうしてレイセンは、僕に特別のプレゼントを贈ってくれた。

——なあチェット。僕の手にあるこれが、君には見えているだろうか？

ああ、まったく愉快だ。こんなにも嬉しいことは、きっと世界のどこを探しても見つからない。こんなに愉快な気分になった宇宙飛行士は、きっと僕くらいのものだろう。

僕の人生は恵まれていたと言っている。アポロに携わり月を歩いた宇宙飛行士にとって、地球に戻って以降の人生は――必ずしも幸福なものではなかったかもしれない。僕が知っているだけでマーキュリー・セブンとニュー・ナインのうち、6人が妻と別れ、2人が科学を信じることをやめてしまった。

あの時代、まだ人々がこの広い宇宙に多くのことを知らずにいたあの時代。この国で英雄となった月面歩行者を、広告塔以外の方法で上手く扱う手段を、NASAも合衆国の社会も、十分に知ってはいなかったんだろう。

そんな中で、僕は良き伴侶、良き子供に恵まれてこの歳まで過ごす事ができた。そんな僕にとつての、たったひとつの心残りが、いまここに解決したばかりなんだ。

まったく、僕は幸せだ。45年を経た今、ここにこうして、僕は月を歩いた証とともにある。

ああ、見えるだろうか、君には？ チェット――チェシャー。

僕の愛する娘、カレンと共にいる君には、僕が今この手に握るアポロ11号の星条旗が見えているだろうか？

親愛なる友人、チェシャー。

この届かない手紙も多分これが最後になる。僕は幸せだった。そして――恐らくもう一度、会う事は叶わないだろう彼女にも、どうかそれを伝えられていれば幸いだ。

August 23, 2012 オハイオの病院にて

マーキュリー・セブン
NASA選抜の1期目の宇宙飛行士7人。ニュー・ナインとともにジェミニ計画、アポロ計画の中心となった。オリジナル・セブンとも。

カレン
カレン・アン・アームストロング。ニール・の娘。1962年、2歳8カ月で病死。

チェット
レオナード・R・チェシャー。アームストロングの戦友、朝鮮戦争で故人となった。

◆アームストロングの病室に残された星条旗のメッセージ

天に光るあの月のように
変わらぬ友情を。

二人に、親愛なる友人とともに。
-2012.8.23-

Reisen・U・Inaba
Neil Alden Armstrong

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。
折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『世界最初の月面歩行者から親愛なる君へ』は、アポロ11号の船長、ニール・アームストロングのファーストマンとしての苦悩と、月のウサギである鈴仙との交流を描いたりする、当サークル4冊目のオフセット本にして二十九冊目のSS本となります。

実は東方でアポロ計画に関する本を書くのはこれが4回目で、お前どれだけアポロ好きなんだと突っ込まれそうな勢い。

鈴仙の本と言いつつ、本文中には彼女の台詞がひとつもないという極めて特殊な構成となっております。もはや東方ジャンルなのかについては疑問符の付く内容と評されても仕方ありません。永夜抄Stage5のセリフ一つだけでここまでやりたい放題してしまった本ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

今回の表紙は雨川れい様をお願いしました。ケープ・カナベラルの発射台に佇む鈴仙の表

情と、彼女の報われた姿を描いて頂き、本当にありがとうございます。

また、いつもながら内容についての相談、装丁等について白身氏、R i z a氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

——それでは。

また次の機会にお会いできることを願って。

【第2版あとがき】

多くの方にご好評を頂き、再版の運びとなりました。今回の再版にあたり、辻堂基信さんに査読をお願いいたしました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

この本に関わる全ての方に、どうもありがとうございます。

◆本書はフィクションです。

◆登場する人物、団体、地名、思想などと実在の人物、団体、地名、思想とは一切関係ありません。

◆参考文献

「ファーストマン ニール・アームストロングの人生」上・下
ジェームズ・R. ハンセン (著), 日暮 雅通, 水谷 淳 (翻訳)
「今も残るアポロが残した月面の星条旗 探査機画像で確認」
(http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG1302Y_U2A810C1CR0000/)

インターネットフリー百科事典 Wikipedia
(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

ニコニコ大百科
(<http://dic.nicovideo.jp/>)

NASA公式サイト
(<http://www.nasa.gov/index.html>)

【奥付】

「世界最初の月面歩行者から
親愛なる君へ」

初版: 平成 25 年 10 月 13 日 東方紅樓夢9

第二版: 平成 26 年 11 月 23 日 博麗神社秋季例大祭

オルハザカサンバンチ
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

あかがね
著者: 銅 おりは

表紙: 雨川れい様

印刷所: (株)ポプルス様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





著:銅おいは／折葉坂三番地
<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙:雨川れい
<http://www.pixiv.net/member.php?id=120249>